

校区のあゆみ

# 松葉

豊橋校区史

18

*Matsuba*

















豊橋市制施行100周年記念

# 校区のあゆみ 松 葉





松葉校区のようす



交通安全指導



おはよう！は朝一番のエネルギー



あいさつ運動



子ども見守り隊



松葉保育園卒園式



校区防災訓練

見守り



くるみ保育園運動会

平成18年度  
松葉校区成人式





# 元気な“まつば”っ子



## 運動会



## カラーガード部、ファンファーレ部



## 豊川の自然に親しむ



## 松葉わくわくサマーホリデイ



## 米作り



## 収穫したお米のおにぎり





祇園祭 手筒・大筒・打ち上げ



笹踊り



# 祭り

おんぞ祭り





# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
松葉校区総代会長

松 井 由 次

「豊橋校区史～校区のあゆみ」発刊にあたり、松葉校区を代表して一言お祝い申し上げます。

松葉校区は古くから豊橋市の中心街として、市と共に栄えて来た歴史と文化があり、伝統ある校区であります。その昔は、東海道は吉田の宿場町として、とりわけ関屋、湊町、船町や北島町など、豊川から船で物資を運ぶ物流の一大拠点として繁栄した時代もあり、そこに人と物が集まり、そしてその中から文化が生まれ、市発展に大きく貢献し、中心的な役割を果たしてきた校区と自負しております。今、時代の変化と共に校区は大きく変わろうとしています。少子高齢化に伴う人口の減少や空洞化など、さまざまな問題に校区総代会として取り組んでいかなければならないと思います。

市制施行100周年はまさに松葉校区と共に歩んだ100年であったと思います。これまでの100年を振り返り、これからの100年を築くためのスタートの100祭としなければなりません。校区では「まじわらまいか三世代」をメインテーマに100祭を祝いたいと考えております。

各町各校区の発展なくして市の発展は有り得ないわけで、市と各町、校区は常に良きパートナーでありたいと思います。松葉校区はさまざまな問題を市に提案申し上げ、今後の校区の活性化に繋げてゆきたいと考えております。

最後に、本冊子の発刊に際し、豊橋市役所及び豊橋市総代会のご尽力ご協力に、校区を代表して厚くお礼申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。



# 目次

# CONTENTS

## 第1章 自然と環境

### 第1節 土地のようす …………… 7

1 位置 …………… 7

2 地形・地質 …………… 8

3 気候と災害 …………… 8

### 第2節 校区の変遷 …………… 8

### 第3節 交通のようす …………… 9

### 第4節 校区と人口 …………… 10

## 第2章 歴史と生活

### 第1節 あゆみ …………… 11

1 原始時代 …………… 11

2 古代から中世へ …………… 11

3 明治から大正へ …………… 13

4 大正から昭和へ …………… 13

5 戦争のころ …………… 14

6 復興から現代へ …………… 14

### 第2節 産業 …………… 16

1 中世から明治維新まで …………… 16

2 明治初期 …………… 19

3 明治中期から現代 …………… 21

### 第3節 校区の活動 …………… 23

1 防災訓練 …………… 23

2 わくわくサマーホリデイ …………… 24

3 子ども見守り隊 …………… 24

4 市民館活動 …………… 25

5 各種団体・委員会の活動 …………… 25

## 第3章 教育と文化

### 第1節 学校教育・保育 …………… 29

1 小学校のあゆみ …………… 29

2 小学校の活動 …………… 33

3 同窓会と周年事業 …………… 37

4 保育園 …………… 39

### 第2節 小学校活動と校区 …………… 40

1 三世代交流 …………… 40

2 米作り …………… 40

3 松葉なかよしフェスティバル …………… 40

4 松葉ふれあい市 …………… 41

### 第3節 史跡と文化財 …………… 41

1 吉田神社 …………… 41

2 湊町神明社 …………… 43

3 青木神社 …………… 45

4 本町天王社 …………… 45

5 悟真寺 …………… 46

6 龍運寺 …………… 46

7 その他の寺院 …………… 46

### 第4節 人物 …………… 47

1 中村道太 …………… 47

2 山本速夫 …………… 47

3 大口喜六 …………… 48

4 斎藤一握 …………… 48

5 鈴木玄仲 …………… 48

6 夏目可敬 …………… 49

7 佐藤閑翠 …………… 49

8 木村庄之助 …………… 49

9 中島駒次 …………… 50

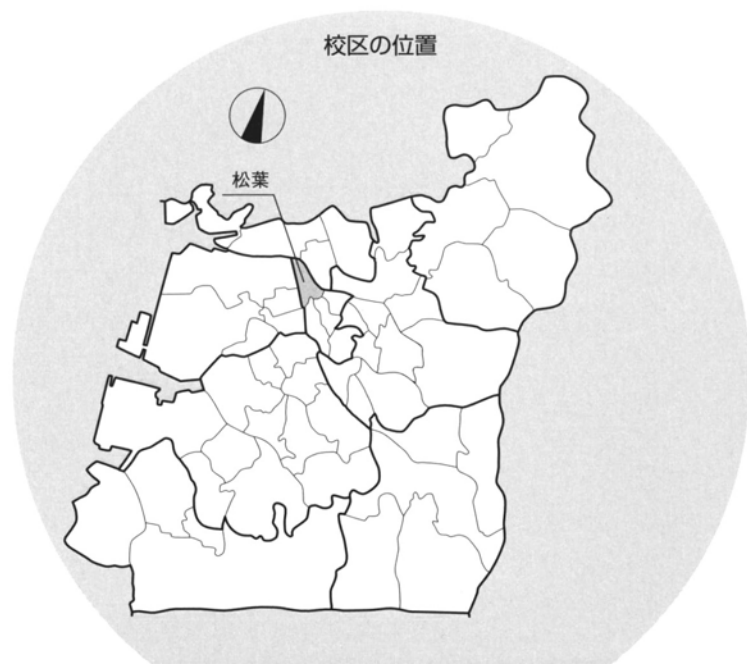
10 清川正二 …………… 50

11 中村正義 …………… 51

12 その他の人物 …………… 51

参考文献 …………… 52

編集後記 …………… 52





# 第1章 自然と環境

## 第1節 土地のようす

### 1 位置

松葉校区は、豊橋駅の北から北東側に広がる市街の中心地域に位置する校区である。西の境は東海道本線の鉄道敷で、北端には豊川が流れ、豊川を境として対岸の下地町と接している。東側は国道1号線を境に八町校区と接し、南東側から南側は新川校区、松山校区と入り組んで隣接している。校区のほぼ中央を東西に国道23号線が走り、南北には、豊橋駅から旧東海道の“とよばし”に向かう大橋通が通っている。この“とよばし”から船町、湊町、上传馬町、新本町から新川校区の札木町へと旧東海道が通っており、江戸時代のころから豊川の吉田港と東海道によって発展してきた地域である。

現在は、この東海道沿いの4町のほか駅よりから大橋通1の1、大橋通1の2、大橋通2丁目、大橋通3丁目、松葉町2丁目、松葉町3丁目、関屋町、絹田町、南島町1丁目、南島町2丁目、西船町、北島町1区、2区の17町からなり、約2,500世帯、6,500人程が居住している。

豊橋市役所の13階から西の方角を眺めると右手に豊川がゆったりと流れている。「とよばし」の左岸が船町で、左手に豊橋駅付近の町並みが見られる。このあたり一帯が松葉校区である。豊橋駅から遠い位置にある東の関屋町と北端の北島町二区まで、徒歩で20～30分程度と比較的駅に近く、歩いて生活できる地域であり、松葉小学校も校区のほぼ中央に位置しており、まとまりのある暮らしやすい校区である。



市役所より“松葉校区”付近を眺める



## 2 地形・地質

松葉校区は松葉町や上伝馬町など南側の洪積台地と南島町、北島町など北側の沖積低地に分かれており、高低差8mほどの坂で結ばれている。洪積台地は、今から数万年前に堆積した土地であり、海拔8～10mの平らな固い地盤である。この台地には縄文時代から人が住み、貝や魚を採って暮らしていた。松葉小学校の南側にあたる石塚地区には、当時の貝塚が残っている。南島町や北島町あたりは、当時まだ豊川の河口で浅い海であった。ところどころに砂州があり、豊川が運んできた土砂が堆積し、沖積低地となって広がった。江戸時代に入ると船町から北島、さらには馬見塚へと豊川の堤防が延長され、開墾されて農地として利用された。この地域の沖積低地は新しい堆積層のため地盤が軟らかく、昭和初期までは、田んぼや湿地帯であったところが多い。坂を境に上の町、下の町と呼ばれ、上の町は商店街などの商業地域、下の町は温室などの農業と製材や製糸業などの工業が盛んで準工業地域に指定されるなど農工業地域として発展してきた。

## 3 気候と災害

松葉校区は、市内の中心部に位置していることから、中消防署が観測している気象データと類似していると考えられる。平成16年度(2004)のデータでは、主たる風向きは西北西で、平均風速3.3m/s、平均気温16.1℃、平均湿度は72.2%、降雨日数は124日で降雨量1,775.5mmである。なお、同年度の降雨量は、平年より多い。また校区中央部分に高低差約8mの坂(段差)があり、冬は北西の季節風が強い。絹田町及び湊町から北島町にかけての沖積低地は、地下水位が高く、地盤も軟ら

かいため、地震時において液状化現象などが起こりやすい地域である。また水害についても洪水ハザードマップで2mの浸水が予測されている地域もあり、豊川の堤防が決壊することになると危険である。北島の堤防には、建設省の水防拠点施設が整備されている。

### 第2節 校区の変遷

明治29年(1896)、船町、湊町、上伝馬町、松葉町、本町、萱町、指笠町、三浦町、中柴町、新銭町、新川町、花園町の12町を学区として、豊橋第三尋常小学校が松葉町に開校した。松葉小学校の前身である。この年を松葉小学校の開校の年としている。明治32年(1899)豊橋西部尋常小学校と改名し、関屋町、札木町、魚町、西八町の4町が編入した。南部尋常小学校の開校により、明治35年(1902)までに中柴町、新銭町、新川町、花園町、魚町、西八町、札木町の7町が南部尋常小学校に編入された。明治39年(1906)、豊橋町が市制指定され豊岡村、花田村を合併して豊橋市が誕生した。市制施行の翌年、明治40年(1907)3月豊橋松葉尋常小学校と改名され、同42年(1909)の狭間小学校の開校によって、萱町、指笠町、三浦町の3町が同校区に編入され、明治44年(1911)に絹田町、南島町のうち鉄道線路の東側が学区に加わった。

昭和8年(1933)、北島町を学区に編入し、さらに同25年(1950)に城海津を、同35年(1960)に大橋通1の1を学区に加え現在に至っている。現在の校区は、大橋通1丁目の1、1丁目の2、同2丁目、同3丁目、松葉町2丁目、同3丁目、上伝馬町、新本町1区、関屋町、湊町、船町、西船町、北島町1区、同2区、南島町1丁目、同2丁目、絹田町の17町である。今年度開校110周年を迎え、市内でも歴史と伝統のある校区である。中学校



校区としては、東の八町校区とあわせ豊城中学校の校区になっている。

### 第3節 交通のようす

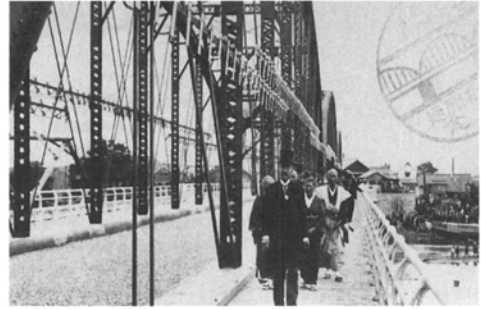
松葉校区は豊川沿いの町、東海道沿いの町として発展してきた。水量の豊富な豊川は、木材や米などの運搬に利用されてきたが、古来より東西を結ぶ交通の要衝でもあった。豊川の川幅は現在よりも広く、平安時代には対岸の小坂井あたりと渡船で結ばれていた。吉田城が築城され、人の往来が多くなったこともあり、元亀元年（1570）、城主酒井忠次は関屋河岸に土橋を築いた。天正18年（1590）吉田城主となった池田輝政は、城郭を広げ、橋の位置を下流の船町に移し、木橋とした。江戸時代に入ると幕府が直接工事を行う重要な橋と位置づけられ、武蔵六郷、矢矧、近江勢多と並ぶ四大橋に数えられた。橋は、長さが95間半（約130m）、幅が4間（約7m）あり水面からも高く、立派な橋であった。吉田大橋は、明治時代までに30数回架け替え、大修繕が行われた。



明治初期の吉田大橋

大正5年（1916）、4年の年月をかけて、それまでの木橋から鉄骨トラス式の橋に架け替えられた。

長さ147.5m、幅7.4mで、最新の技術で造られたすばらしい橋であった。「豊橋」（とよばし）と名付けられ、長い間市民に親しまれた。



大正時代のトラス橋

昭和54年（1979）豊川の改修とともに新しい橋が計画された。翌年から工事が行われ、同61年（1986）に完成した。開通の日には、松葉小学校の6年生が参加し、同校のマーチングバンドが、渡り初めに花を添えた。



豊川 I C および国道1号線から豊橋駅に向かう大橋通と蒲郡へ向かう23号線は、交通量が多い。平成7年度（1995）の調査では、8時間あたりの交通量が、大橋通の湊町付近で約16,000台、会議所前で約9,000台、23号線新栄付近で約18,000台と記録されている。この2路線が交差する守下の交差点は、交通の要所であり、松葉小学校へ通う子どもたちの安全のため、いち早く4面の歩道橋がかけられた。



現在の守下交差点付近



松葉町から湊町・大橋通にかけては、道路網も整備されているが、船町から北島にかけては、道が狭く、区画整理もあまり進んでいない。

#### 第4節 校区と人口

昭和23年（1948）、戦災復興の区画整理事業が始まり、14年の歳月をかけ同37年（1962）全ての事業が完了した。区画整理事業区域は、現在の駅を中心とした市街地がほとんどで、松葉校区も大半が含まれている。面積は豊橋駅周辺約300haで、現在の豊橋駅周辺の市街地の基盤が整備されることになった。

豊橋市では昭和25年（1950）から国勢調査の関係資料が整理されており、それをもとに校区の人口の移り変わりを記述した。

この昭和25年（1950）という時代は、現在話題となっている「団塊の世代」という年代が生まれた最後の年にあたり、ちょうどこの頃、松葉、松山、新川といった豊橋駅を中心とした「中心市街地」は、当時の社会の勢いに敏感に反応し、人口も右肩上がりの状態が続いていた時代であった。

松葉校区の人口は、同年の調査によると10,951人であったが、5年後の同30年（1955）には12,848人となり、5年間で20%増加し、ピーク期をむかえた。その後、昭和40年（1965）ぐらいまでは12,000人を超えており、高い人口を維持していた。

その後、日本社会は拡大を続け、豊橋市も郊外の開発が進み、人口の増加は周辺地域へ移っていった。こうした開発が郊外の発展をもたらし、車社会の浸透も伴って、まちの中心地域は急速に勢いを失い、人口もそれに伴い減少の一途をたどっていった。

松葉校区の人口も、昭和40年（1965）の12,573人から平成12年（2000）には6,767人と

激減し、その後も減少を続けている。平成17年度（2005）におこなった国勢調査では、6,500人を切るのではないかと予測されている。しかし、松葉をはじめ中心部の校区では、郊外に移転した工場や店舗などの跡地に高層マンションやアパートが建ち始め、数年前から、人口の減少率が下がり、今後は高齢者の居住など新たな人口の増加も期待されている。

年	全体	男	女
昭和25年	10,951	5,296	5,655
30年	12,848	6,202	6,646
35年	12,730	6,152	6,578
40年	12,573	5,921	6,652
45年	11,095	5,182	5,913
50年	9,701	4,525	5,176
55年	8,473	3,921	4,552
60年	7,945	3,724	4,221
平成2年	7,299	3,448	3,851
7年	7,074	3,345	3,729
12年	6,767	3,250	3,517

町別	世帯	男	女	人口
大橋通一丁目	68	76	106	182
大橋通二丁目	47	36	38	74
大橋通三丁目	279	326	348	674
上伝馬町	217	171	225	396
北島町	786	991	1050	2041
絹田町	128	156	167	323
新本町	112	136	168	304
関屋町	164	204	195	399
船町	417	506	550	1056
松葉町二丁目	54	55	72	127
松葉町三丁目	82	102	121	223
湊町	115	147	184	331
南島町一丁目	156	160	190	350
南島町二丁目	143	173	203	376

平成17年度行政町別人口  
（一部校区外）

- \* 新本町は一区・二区
- \* 花田町石塚は別途



## 第2章 歴史と生活

### 第1節 あゆみ

#### 1 原始時代

松葉小学校の南側の台地から貝殻や土器、石斧や子どもの人骨が見つかった。石塚貝塚と呼ばれる今から6,000年前の縄文時代の遺跡である。この台地には、縄文時代から人が住んでいたと考えられ、遠浅の海が広がり、木が生い茂り、鳥や獣が住む自然に恵まれた豊かな地域であったようである。松葉小学校のあたりから、守下、船町、北島にかけては、当時まだ海であった。穏やかな内海の三河湾はアサリやのりの産地として知られ、この豊富な海の幸のおかげで、古くからこの地域に人が住み着いたものと考えられている。大きく曲がりくねって流れる豊川は、氾濫して流れを変え、土砂を運び、堆積して所々に中州を作っていた。南島や北島の辺りにかけて、大きな中州が広がり、地名として残されてきた。

#### 2 古代から中世へ

##### (1) 志香須賀の渡し

平安時代になると京の都を中心とする東西交通が盛んになり、米などの物資が都に運ばれるようになった。橋の無い時代、川は交通の要衝であり、浅瀬を渡ったり、船を漕いで渡っていた。平安時代の天暦8年(954)向こう岸の小坂井あたりと行き来する渡船があり、「志香須賀(しかすが)の渡し」と呼ばれ、古くから歌に詠まれた名高い名所となってい

た。「冬、志香須賀の渡りに雪降る、旅人船に乗りて渡りする所」と安和2年(969)の資料に書かれている。昔は今よりもずっと川幅が広く、三河湾から吹く風も強く、悪天候の日には、渡れないことも多かったようである。「米などを都に運ぶ男たちが、10日も渡れずけんかして怪我をしたり、物資を川に流す」などの出来事もあったと伝えられ、東海道の難所であった。豊川を歌った歌ではないが「箱根八里は馬でも越すが越すに越されぬ大井川」とあるように、昔は川の渡りは大変なことであった。しかし、12世紀の頃になると、不便で危険を伴うこの渡しを避け、豊川の上流の浅瀬を渡るようになった。

##### (2) 吉田城と城下町

永正2年(1505)牧野古白が豊川と朝倉川の合流地点に城を築いた。初め、今橋城と呼ばれ、のち大永2年(1522)に吉田城と改名された。今川氏、徳川氏、武田氏らの武将によって戦いが繰り返され、めまぐるしく城主が変わっていった。吉田が徳川の所領になり、家康の家臣酒井忠次が城主となって関屋に土橋がかけられ、人の往来が頻繁になった。忠次は豊川の堤防の築造に力を注ぎ、新田の開発を重視した。天正18年(1590)城主となった池田輝政は、吉田城の大改築を行い、城下町の整備を図った。さらに吉田大橋を下流に移し、丈夫な堤防を築き町並みを造らせて、この地を船町と名付けた。慶長5年(1600)の関が原の合戦には、船町河岸の人々が、多くの船を出して協力した。



### (3) 吉田の宿

江戸に幕府を開いた徳川家康は江戸を中心にして五街道を整えた。江戸と京都を結ぶ東海道は、街道の中でも最も重要な道路であり、街道沿いには多くの譜代大名が配置された。東海道には53の宿駅が設けられ、吉田は江戸から数えて34番目の宿場となった。江戸時代の吉田には、東海道沿いの表町と通り以外の裏町にそれぞれ12ヶ町あり、合わせて吉田24町といわれた。寛延3年（1750）の吉田宿の戸数は1,087軒、人口5,530人であった。

札木町には、本陣が置かれ上伝馬・札木・本町は、宿場まちの中心にあたり、一番賑やかな町並みであった。享和2年（1802）の記録では、本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠65軒とある。東海道五十三次の浮世絵を書いた広重は、天保3年（1832）にこの地を訪れている。吉田の宿で昼食をとり、鳳来寺へ参詣しようとしたが、急に空模様が悪くなり、吉田に宿泊した。広重は、旅日記に「夕景より本降りとなる」「よき宿へ泊まり」「酒香味良し」と書いている。

江戸幕府は、重要な街道である東海道に伝馬制を実施した。伝馬役の仕事は、大名行列の荷物を次の宿場まで運んでいくもので、吉田の管轄は、上りは二川宿、下りは御油宿までであった。吉田の城下は、馬100匹と歩行役の夫45人と決められており、田町には馬7匹、上伝馬町には馬21匹と歩行役が割り当てられた。伝馬役、歩行役のほかに平役があった。平役は人足役のことで、御飛脚、御状箱、御用物などの番人をつとめた。宿場町の人たちは参勤交代などで大名が行き来するたびにかり出され負担となった。幕府の無賃伝馬は幕府公用者、将軍家に関する書状、荷などで、幕府は無賃継立の代償として、伝馬宿の宅地租を免除した。これを「地子免許」と言った。

吉田大橋から東海道吉田宿、表町の船町、田町、坂下町、上伝馬町と裏町の下り町あたりが、松葉校区の範囲にあたる。

### (4) 吉田湊と船町

江戸時代の約240年にわたり、豊川は奥三河と吉田を結ぶ物資の輸送路として、人々の生活を支えてきた。奥三河から運び込まれた物資は、吉田湊で大きな船に積み替えられ、遠く江戸をはじめ各地に輸送された。上流からは、木材・木製品・竹・炭・石製品・しいたけ・茶などが運びこまれた。帰りの船には塩や日用品が積み込まれた。吉田湊は、豊川を行きかう川船や、江戸へ向かう廻船が数多く出入りして、大変な賑わいを見せていた。また、伊勢に通う航路の起点でもあり、多くの旅人が吉田湊を利用した。俳人の服部嵐雪が、元禄13年（1700）に、吉田湊から伊勢へ向かう船に乗った時のようすを「吉田の宿に日の暮れたり、橋のたもとまで行きたれば、船に船にと呼ぶ」と書いている。正徳2年（1712）の記録では、江戸に向かう大きな船が4隻、伊勢に通う船が17隻あったとあり、享保15年（1730）には、5月から8月上旬の3ヶ月間に吉田と伊勢の間を行き来した人の数は、38,800人あまりだったと記録されている。明治時代になっても豊川河岸の港町として、賑わいを見せ、物資の集まる港として、ますます発展してきた。川沿いの関屋町、湊町、船町には、問屋や旅館が並んでいた。



大正時代の関屋河岸



### 3 明治から大正へ

#### (1) 豊橋駅と町の発展

明治21年（1888）9月、東海道線の開通に伴い豊橋駅ができた。駅ができた場所は、豊橋の中心地から少し離れたところで、そのころ豊橋で一番にぎやかだった上伝馬町まで新しく停車場通りが造られた。さらに9年後の明治30年（1897）には豊川鉄道（今の飯田線）が開通した。鉄道を利用する人も増えて、町に活気が出てきた。1日あたり平均700人が駅を利用し、およそ60トンの貨物が駅に着いた。明治44年（1911）駅を広げる工事が始まり、新停車場通り（今の広小路）が造られた。大正4年（1915）には、駅から船町・とよばしに通じる道路（今の大橋通）が完成した。翌年3月、新しい駅が完成し、駅前には旅館や食堂、商店が立ち並んだ。大正14年（1925）には市内電車が駅前から札木方面に走るようになった。



豊川鉄道開通記念列車

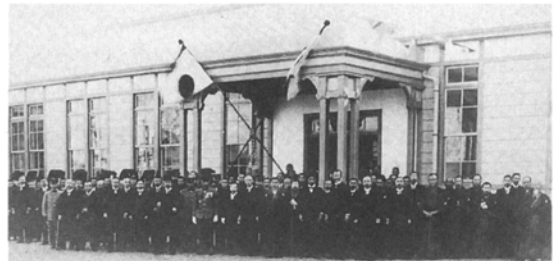
#### (2) 明治・大正時代、校区にあった施設

明治初期、吉田藩の武士中西健蔵は、吉田城の境内あたりで花畑をつくっていた。四季折々に美しい花を咲かせすばらしい庭園になっていた。渡辺華山の子、渡辺小華は、この花畑に心を引かれ「百花園」と名付け、明治10年（1877）から明治15年（1882）まで園内に画室を設け、絵を描いたり、東三河の人たちに絵を教えたりしていた。福沢諭吉や板垣退助もここを訪れよく会議を行った。

明治21年（1888）に松葉町に豊橋慈善病院が開院した。市民病院の前身で、明治35年（1902）豊橋病院となり、昭和7年（1932）、豊橋市が買い上げ、市立豊橋病院となった。内科、外科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科のある総合病院で、松葉小学校の跡地に建てられたといわれている。

明治32年（1899）に安藤政治郎が豊橋駅前に私立動物園を開いた。「安藤動物園」といい、ツル・ペンギン・クマ・トラなどが飼われていた。明治45年（1912）、駅前の開発のため花田町守下（今の松葉小学校付近）に移された。大正4年（1915）には、49種類、248頭の動物がいた。小学生の遠足に利用されたが、昭和9年（1934）に向山に移設された。

明治45年（1912）に愛知県で初めて公立図書館が花田町守下に建設されることになった。大正2年（1913）完成、羽田八幡宮文庫が蔵書していた本を中心にして、9,806冊の蔵書で開館した。1日1,000人以上の利用者があり、大変賑わっていたようである。昭和13年（1938）、西八町に移転した。



開会式当日の図書館

### 4 大正から昭和へ

明治後期から大正時代にかけて、上伝馬町には、河原座、弥生座などの演劇・演芸場があった。旅館、料理屋、商店なども多く、中心的なにぎわいを見せていた。河原座は大正6年（1917）に、弥生座は同10年（1921）にそれぞれ映画として生まれ変わった。弥生座



は、日活直営帝国館となり、木造洋館造りで収容人員は500人程であった。上传馬坂を下ると湊町で、昭和の初期まで、馬車、大八車が行き来した。湊町から守下に向かう新道が走り、後方には湊町神明社の森が広がっていた。上传馬坂は、北島の青果市場で仕入れた八百屋の荷車や近郊から売りに来る百姓の野菜売り、牛乳配達 of 箱車、天秤棒を担いだしじみ売り、鈴を鳴らしてやってくる佃煮売りなどが頻繁に往来した。



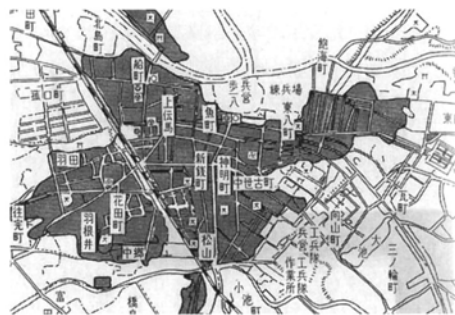
坂を登る荷車の後押しを仕事にする立ちん棒という名物男も現れた。昭和3年(1928)には、花田町石塚に当時としては珍しい鉄筋コンクリート造りで地下1階、地上3階建ての豊橋商工会議所ビルが建てられた。

## 5 戦争のころ

戦時中の昭和19年(1944)12月7日、午後1時35分、熊野灘を震源地とする東南海地震が起きた。松葉小学校は、1階の壁が崩れ、2階へ上る階段が落ちた。運動場には亀裂が走り、砂や水が噴出した。小学校のあたりは、以前海であり、液状化現象が起こったようである。空襲警報が発令され、子どもが帰宅したあとであり、学校での直接の被害は無かった。この地震から37日後の昭和20年(1945)1月13日にも渥美湾を震源とする三河地震が発生した。余震は1ヶ月近くも続き、冬の寒空のもと屋外で過ごした人も多かった。戦争が激しくなる中で起こった2度の地震は、この地域の人たちにとって、物質的・精神的な

負担となった。

愛知県は軍の指導により、空襲を受けたときの火災による類焼を防ぐため、家屋の疎開計画を立てた。松葉校区では駅前から守下町までと関屋町から上传馬町を抜け駅前大通までの間の建物が買い上げられて取り壊された。他に西八町から神明町までの南北に3すじの空地が設けられた。取り壊した家屋の片付かないうちに豊橋空襲がやってきた。昭和20年(1945)6月20日午前0時40分、サイレンがなり始め、東海管区空襲警報が発令された。市民のほとんどが、闇の中を防空壕に避難しはじめた。次から次へと焼夷弾が炸裂し、家屋が燃える音がした。防空壕も危険になり、火の海の中、豊川の堤防や吉田城などに避難し、流れの中に身を入れて、火の粉を避けている人も多かった。松葉校区はほとんどが焼き尽くされ、石塚と船町の一部、吉田神社あたりが焼け残った。



豊橋市戦災被害図

## 6 復興から現代へ

戦後の復興、新しいまちづくりは、駅前から始められ、駅を中心に四方に広がる道路が造られた。拡張・新設された広い道路へ市内線(市電)の軌道が移設され、複線化が図られた。松葉町の市民病院前まで軌道が敷設され、病院へ訪れる市民の交通手段として利用された。しかし昭和44年(1969)、駅・地下道の新設工事のため駅前—市民病院前間が休



止され、4年後この区間は再び復旧されることなく廃止された。



商工会議所前を走る市電

校区のまちづくりも松葉町から整えられていった。空襲により焼け野原になった豊橋の町を、緑の多い潤いのある町にしようと市民が立ち上がった。昭和27年（1952）に市内中心部の公園として松葉公園が完成した。ヒマラヤスギや楠が大きく育ち緑の多い公園として市民に親しまれてきた。平成6年（1994）から地下駐車場の整備が始まり、同10年（1998）新しい公園として再整備された。中央に円形の広場と舞台が設けられ、イベントなど市民に利用されている。

豊橋市民病院は、戦禍を免れたが、建物は老朽化しており、昭和25年（1950）南病棟の建設を始めとして、増改築を重ね、同34年（1959）には本館が完成、同44年（1969）に地下1階地上5階建ての第2病棟ができた。市民病院に勤務する職員や、2,000人に上る外来患者などにより、松葉町の商店街は、賑わいを見せていた。



移転前の旧市民病院

しかし、市民病院の移転計画が承認され、新しい病院が青竹町に建設されることになった。平成5年（1993）着工、同8年（1996）5月、地上9階建ての新市民病院が完成移転した。建物が解体された市民病院の跡地はイベント会場などに利用されてきたが、平成18年度（2006）、子ども関連の施設が建設されることになった。

花田町石塚にある豊橋商工会議所は、昭和41年（1966）に建てかえられて、地下1階、地上6階のビルが完成した。平成5年（1993）には、地下1階、地上9階建ての新館が完成し、豊橋市商工業の拠点として、各種の団体などが入居し、広く市民に利用されている。

北島町には、旧国鉄の貨物駅があった。明治30年（1897）豊川鉄道（現飯田線）の豊橋～豊川間が開通したが、3年後の同33年（1900）、貨物専用の支線が敷かれ船町という貨物駅が設置された。船町河岸より下流300mあたりに掘割によって船だまりが設けられ、レンガ・瓦・木材などが陸揚げされ鉄道で各地に運ばれた。東三河地域の流通物資の約70%が荷揚げされたといわれている。昭和2年（1927）には豊川鉄道の旅客駅として新船町駅が開設された。昭和18年（1943）豊川鉄道の国有化により船町駅に改称された。湊町、船町、北島町には、製材工場や木材問屋が多く、貨車で木材や製品が運びこまれたり積み出されたりした。戦後は石油タンク、飼料基地なども設けられ、多くの貨物が取り扱われた。船町貨物駅は昭和40年代（1965～1974）まで、蒸気機関車が貨物車を運んでいた。その後ディーゼル機関車が運行していたが、トラック輸送が主流となり、現在は引込み線が廃止され、物流のコンテナ基地になっている。旅客駅としての船町駅は、高度成長期の昭和40年代（1965～1974）、北島町、野田町、菰口町の工場に通勤する乗降客で賑わった。



船町駅の蒸気機関車（1969年）

昭和50年（1975）以降、工場の移転と車社会への移行によって、次第に乗降客を減らしてきたが、近年はマンションなどの建設により、周辺人口の減少に歯止めがかかり、通学や高齢者などに利用されている。

豊川の河川敷は、昭和40年代（1965～1974）まで、自然の景観がそのまま残っていた。子どもたちが土手で遊び、魚釣りや干潟でのシジミ取りなど川で遊んだ。昭和40年（1965）、豊川放水路の完成を受け、本川の改修が進められた。吉田大橋より下流部分は、昭和44年度（1969）より用地買収が始められ、特殊堤により築堤、護岸、根固め等を施工し、昭和62年度（1987）をもって既成している。

改修工事の一環として、地域周辺と豊川の豊かな流れが織りなす貴重な河川のオープンスペースを活用し、河川に親しんでもらう施設づくりを目的として、親水性、景観性、生態系保全を配慮した環境護岸工事が進められ整備された。「緑と水の散歩道」として、吉田城下から船町まで、御影石を使用した散策路と石積の親

水護岸が完成した。護岸のデザインと絵画パネルは市内の小学校の先生と生徒の



湊町付近の親水護岸

作品である。祇園祭の花火大会には、多くの見物客でにぎわっている。

湊町公園は、神明社に隣接して整備され、銀杏並木と水神池が四季折々の景観を生み出して親しまれている。

北島町には洪水時に円滑で効果的な緊急復旧活動を行う目的で、的確な情報提供や水防活動の拠点となる施設が整備された。建設省、豊川工事事務所、豊川出張所が併設され、平常時は豊川の歴史や川の自然を展示し、KAWAKKO（かわっこ）資料館として一般に公開している。

下流の堤防には水防用の土砂が備蓄され、樹木が植えられて公園が整備されている。公園内には緊急用のヘリポートが設置されている。遊具や花壇が設置され遊び場となっている。



北島河川敷公園

豊橋市は、街路樹が美しい街として評価されており、昭和57年（1982）には、街路樹の豊富さが評価されて「緑の都市賞」建設大臣賞を受賞、さらに同59年（1984）には内閣総理大臣賞を受賞している。校区には蒲郡街道のケヤキ並木、関屋町のイチョウ並木などがあり、親しまれている。

## 第2節 産業

### 1 中世から明治維新まで

松葉校区という自主的自治機関の名称は、昭和28年（1953）5月にこれまでの町単位の連絡員の組織から小学校区の組織の校区総代



会になった。そのため松葉校区の商工業の沿革は明治以前・大正・昭和27年（1952）までは、豊橋の中心部について述べてゆく事とする。

豊橋の商工業の歴史はそれほど古くはない。豊橋歴史大年表を見ても、大和、奈良、平安、鎌倉を経て、室町時代永正2年（1505）に牧野古白が今橋城を構築したことにより、明応9年（1500）前後が起源とおもわれる。永祿7年（1564）には、徳川家康が酒井忠次を城代として、一円を吉田とよんだといわれる。鎌倉・室町期の主な産業が農業であり、人口の増加とともに墾田が私有化され、律令制は崩れ、貴族・寺社は零細農民を使って開墾を行って私有地を増やし、農民は荘園領主によって公民の負担の免除を獲得していった。この荘園から武士が出現し、結局は源氏・平氏という大武士団に成長し、いわゆる源平の争いが続き鎌倉幕府の成立につながり、室町幕府・徳川幕府となる。

これらの時代の主な産業は農業で、稲作が中心であり、耕作農具のほか収穫・脱穀用の農器具も工夫された。一方、牛馬の使用も頻繁化されて、馬は軍事上重要視され交通・運搬の手段として貴重とされた。豊橋牟呂地区で発掘された「公文遺跡」から平安末～鎌倉時代のものと考えられる大量の馬と牛の骨が出土しているが、これは三河地区でも牛馬の使用が盛んであった証拠であるとおもわれる。それと同じくして漁業も沿岸部の地域は、釣り、投網等により行われており、漁獲対象によって網の目の大小や長さ、広さなどの規模も工夫され発達したとみられる。消費地に近い地域には魚市が置かれた。手工業は自ら仕事場を持ち、手道具により注文に応じて各種の用具を作った。親方のもとの長年にわたり技能を習得する徒弟制度はこの時代から始まり、近代社会にも大きく影響を与えた。

手工業の発達には、農地・山林・鉱山などか

らその原料を得て、それを製品化して、農業を始めとする諸産業の発達を促し、商品の流通・商業の発達をもたらした。商品流通に伴い、商人の活動も種々の形がみられるようになり、町では常設の店をもつ商人も現れ、物資の仲立ちを行う仲買人や行商人も出現するようになった。村には市場も立ち、定期の市が各地で開かれるようになった。商業の発達は金融業を必要とし、土倉・酒屋などの金融業を生み出した。このことが都市の成長を促し、商工業の拠点・経済の中心的性格を強くしていった。城が築かれ、戦乱（応仁の乱等）が全国各地で繰り広げられたが、こうした戦乱の中にあっても商工業の発達はみられる。

豊橋でも現在の八町近辺に「二日市」の地名があったといわれ、市が立っていたことが推定される。城下町において商工業の発達は自己の戦力につながり、自領の繁栄にもなり、戦国武将は大いに奨励するところであった。牧野古白が今橋城築城に際し、牛久保から鍛冶集団を城下に移住させたように、戦国大名は自分の城下に職能集団や商人を置き、その保護により城下の繁栄を目指した。豊臣秀吉が小田原の北条氏を陥落させて、その論功行賞として、湖西と三河を池田輝政に与え、天正18年（1590）吉田城に入城して、城を中心に城下町の拡張整備にとりかかった。それから小笠原家四代（1645～1687）にかけて整備され、貞享5年（1688）の吉田町筋絵図によると、東海道に沿う表町12町・裏町12町の計24町から成り立っている。

これら24町は、商人と職人の町であり、業種別に集められていた。なかでも商家は城下の主な道に沿って置かれたが、特に城の大手門近くの呉服町・札木町・本町には一流の商家が軒を並べ、町は職人と商人或いは職業別に配置され、船町・上伝馬町・呉服町・鍛冶町・魚町・紺屋町などで、例えば、魚町は町

吉田惣町戸数一覧 貞享5年 1688

区別	町名	現町名	家数	区別	町名	現町名	家数
表町	船町	船町	90軒	裏町	天王町	問屋町など	15軒
	田町	湊町	70軒		萱町	萱町	49軒
	坂下町	湊町	28軒		指笠町	新本町	28軒
	上伝馬町	上伝馬町	64軒		御輿休町	新本町	11軒
	本町	新本町など	34軒		魚町	魚町	127軒
	札木町	札木町	65軒		地六町	花園町	17軒
	呉服町	呉服町	34軒		下り町	花園町	19軒
	曲尺手町	曲尺手町	66軒		利町	札木町	20軒
	鍛冶町	鍛冶町	61軒		紺屋町	大手町	16軒
	下モ町	鍛冶町	21軒		元鍛冶町	新吉町	24軒
	今新町	西新町	60軒		手間町	大手町	27軒
	元新町	東新町	38軒		世古町	大手町	6軒

〔豊橋市史第二巻〕より

名通り魚問屋・魚仲買の集まりである。近海でとれた魚類をこの町で一手に引き受け、扱った店は享和2年(1802)の記録によれば「魚問屋13、魚仲買58、魚屋9」となっている。寛延3年(1750)当時の魚町の戸数は119軒で時代的にはかなりの違いはあるが、全戸数の70%に及んだ。同様に先に記した鍛冶町には、同年には45人居り当時の戸数が62軒であるから、やはり70%近く占めている。

吉田における特色的なものとして寛永通宝の鑄造があげられる。寛永14年(1637)吉田城主・水野忠清の時代に幕府から鑄造の命を受け、白山権現社の境内で鑄造したといわれ、周辺の町が新銭町と言われるようになった。船町は町名のごとく、渡船や船運の船役を務める町であった。そこでは舟番組が組織され、これらの業者は城主による保護を受けていた。吉田の町には、次表のとおり店の数・職人の数があった。

吉田宿 商屋・職人一覧 享和2年 1802

名称：数	名称：数	名称：数	名称：数	名称：数
鍛問屋 1	鍋釜屋 5	縮夾屋 2	下駄屋 2	柄巻師 1
鍛屋 47	鑄掛屋 2	薬種屋 7	商人屋 7	髮結 7
呉服屋 2	瀬戸物屋 5	洗濯屋 13	川船屋 5	塗師 4
雑物屋 21	焼糺屋 1	ろうそくや 5	船問屋 7	表具師 4
魚問屋 13	小問物屋 18	ぼくちや 6	干鰯屋 5	籠師 2
魚中売 58	油屋 5	付木屋 1	新屋 8	仕立物師 9
肴屋 9	練油屋 4	煮売あまぎや屋 8	釘師 13	石工 2
酒屋 2	青物屋 18	餅屋 5	農鍛冶 36	習師 9
呉問屋 2	醬油屋 1	餅屋 12	船鍛冶 1	傘師 7
剃髪屋 23	酒造屋 6	煎餅屋 3	大工 31	白作り 1
剃髪手間取 13	醸造屋 1	饅頭屋 6	船大工 1	輦輪師 1
呉人師 2	居酒屋 6	菓子屋 16	木挽 3	提灯師 4
塩問屋 5	こな屋 4	茶屋 8	紺屋 16	指物師 2
塩問屋 4	豆腐屋 15	すしや 2	桶屋 12	合羽師 2
靴屋 5	紙屋 2	うどんや 7	左官 4	
麩屋 1	綿屋 4	風呂屋 19	研屋 3	
白木屋 3	綿打 5	足袋屋 3	鞆師 2	

〔豊橋市史第二巻〕より

また吉田は宿場町でもあり、宿立人馬継ぎたては、表町・裏町24町の全てが負い、本陣・脇本陣・旅籠などが軒を列ねて道筋の両側に建っており、これら多くは札木町・本町を中心に集まっていた。しかし時代が進むにつれて、貨幣経済の農村浸透により農村にも商人が出入りして換金作物の栽培が進み、商店・職人の進出が見られるようになる。農村の若者に商人や職人を志向する者が目立ち、江戸時代の後半には農本主義経済(年貢による政治経済)が少しずつ崩れてくる。そして諸産業は工夫を凝らして、たとえば地引網である。太平洋・三河湾に接する地域では古くから漁業が行われていたが、農業を営み魚群が沿岸に押し寄せると、村中総出で浜にでて網を引いた。これらは村の裕福な「高持百姓」が舟と網を持って網元になっていた。このような漁獲物は吉田の魚町に運ばれ、近隣の需要者に売るばかりでなく三河の山間部や遠くは信州方面にも出荷した。これらの荷は、三州馬稼ぎや信州中馬によって運ばれた。また江戸時代の終わり頃始まった「のり」養殖は、安政元年(1854)前芝の地先でよしや竹の枯れ枝に付着した「のり」を発見したことに始まると言う。そのほか製塩と、嵩山・牛川の石灰の製造がある。明治以前における豊橋地方の産業については、以下の通りである。

- ① 早くから地理上の有利さを生かし、舟運、陸路で遠方と交易している。
- ② 生糸・絹織物、陶器、魚類加工品、農機具生産、貨幣鑄造技術などが、吉田物として高い評価を受けていた。

慶応3年(1867)10月江戸幕府は終わりを告げ、明治維新となる。明治5年(1872)、廃藩置県後、愛知県内は15大区に分けられる。豊橋は15区に属し会所は豊橋関屋町に置かれた。明治8年(1875)士族の米による扶持を金禄支給と改め、家禄の整理で扶持停止は士



族にとっては大問題であった。

## 2 明治初期

### (1) 養蚕業

禄を離れた豊橋藩の士族約1,400人の行く先には深刻なものがあり、三ノ輪に新地を切り開き帰農した者や、「武士の商法」といわれるように、多くは新職業になじめず不安定な生活する者が多かった。こうした折りに養蚕を起こし、製糸による士族授産事業に懸命であった士族として、柴田豊水が知られる。これらの人々の努力もあって豊橋周辺の桑葉栽培は、明治の始めからおこなわれた。

### (2) 製糸業

養蚕が進展しても養蚕農家の利益が上がりず、そこで製糸業をこの地に起こそうとしたのが、農村振興と士族授産にかけた、朝倉仁右衛門、柴田豊水、小久保彦十郎らの有志で、明治11年（1878）に豊橋関屋に50人操りの座操り製糸場をつくり操業した。各自が自分の栽培した桑葉を持ち寄り、その質の向上を図ると共に先進地で機械製糸が行われているのに着目して、先進地信州に技術者を派遣している。主な生糸工場は明治29年（1896）に、三浦碧水、遠藤安太郎、神戸三九郎、大口喜六らが発起人になり創立した「豊橋製糸会社」があり、年々工場数は増え、同41年（1908）には工場経営者の組合の設立申請を農商務大臣に提出し許可され、加入者は115人を数えた。（清水製糸、大林製糸、福井製糸等）

### (3) 玉糸製糸

豊橋地方の製糸業の大きな特色は、玉糸製糸であった。普通、製糸は一匹の蚕がつくる繭の繊維から作られる。ところが二匹の蚕がつくる形も大きい玉繭からとれる繊維は、普

通の繭のものより質的におとる。玉繭は、養蚕家がつくる繭のうち2割はどうしても出るもので、一般的に「くず」繭と呼ばれ真綿の材料に使用した程度であった。

群馬県出身の小淵志ちが、二川の小さな製糸工場で原料不足に悩んだ時、玉繭から糸を取り出す方法を発見した玉糸製糸は、競争相手もなく、しかも安価な原料という有利な条件の下、みごとに成功し、一時は、苦労もあったが、大林宇吉の蒸気機関を応用した玉糸の機械製糸により、豊橋の玉糸製糸は質・量ともに成長を遂げ、国内市場はもとより、明治35年（1902）には、ロシアにまで輸出された。その後も、増加の一途をたどって全国の生産の40～50%を占め、豊橋は「玉糸の町」として知られるようになった。

### (4) 蚕糸関連業

明治30年代（1897～1906）になると、生糸業・玉糸業ともに好、不況の波はあっても、豊橋周辺に定着した事業として発展し続けた。こうした事業が円滑に行われるために必要とされるのは、仲介業を主とする商店の出現である。つまり繭問屋であり生糸問屋である。明治20年（1887）3月、白井吉太郎・柴田新吉は共同して札幌の高安旅館の一室を借りて蚕糸周旋商店を起こした。これが端緒となり繭問屋の数も増え遠くは関東方面まで販路を広げるほどであった。こうした問屋には、近隣の村から買い集めた仲買人が大きな繭袋にいっぱい詰めて持ち込んだり、直接養蚕農家が八車に乗せて運び込んだりした。特に春繭（5月末前後）や夏秋繭（8月～10月）の頃には大変な賑わいを見せ、日清戦争後は景気の上昇もあって、製糸増産を目指してフル活動をしていた。集繭も特に玉繭は周辺農家からだけでは賄い切れなかった。そのため、遠隔地を問わず全国規模にわたって原料繭が

集められた。

豊橋周辺の製糸場の増加と生糸の増産は繭問屋の出現を必要としたように、製品をさばく生糸問屋の誕生を必要とした。繭問屋を営んでいた商店が協力して生糸問屋を創立し、明治26年（1893）には繭問屋河合商店（本町）が生糸問屋を兼業した。

このように製糸関連商店の集まった札木・本町の通り（山本商店、藤田商店、山一商店、宮田商店、小野繭店、伊藤商店、玉村商店等）は、商売繁盛し賑わいをたかめ、生糸の製造、玉糸の製造とそれに関係する商店などを含めて明治時代から豊橋地方は全国的に知られるようになった。

### (5) たばこ製造業

豊橋周辺で煙草が製造されるようになったのは天明年間（1781～1788）の頃とされている。創始者は原田久左衛門と伝えられる。江戸時代、田町、坂下町（湊町）周辺に煙草製造業者が十数軒を数え、「吉田煙草」として各地に知られていた。明治に入り、吉田煙草の製造業者は増加し同9年（1876）には35人になった。このころの煙草の製造は、信州飯田や三河の設楽地方が葉煙草の生産地であり、豊川の船運や信州中馬、三州馬の交通によって原料を仕入れ、吉田では小規模な工場の、手刻みによる手工業であった。特に大きな工場は、原田万久の工場で、新しい機械や技術を取り入れ生産を伸ばし、働く人が447人で、吉田の全生産量の6割を占め、刻み煙草の生



煙草工場

産量は全国一で、『万久の刻み煙草』と言われ、味もよく人気があった。

明治14年（1881）原田万久が中心となり煙草製造業者に呼び掛け同業組合を結成し「製煙社」を名乗り、加盟業者は煙草の品質を高め定価を統一し、品質吟味のうえ品質保証するため社印章を捺印し販売した。加盟業者は、原田万久（湊町）、川西源次郎（下地町）、原田幸七（湊町）、篠原常次（新銭町）、伊藤茂平（湊町）、松下栄三郎（八町）、星野久八（船町）、鈴木儀平（湊町）、伊藤太一郎（湊町）、等であった。明治政府は国家財政増収の目的をもって明治29年（1896）2月に「葉煙草専売法」を公布し販売制度改革の第一歩を踏み出した。同37年（1904）から煙草の製造が国営になり、そのため豊橋の民営煙草は姿を消した。



当時のパッケージ

### (6) 筆製造業

筆が豊橋周辺で製造されるようになったのは江戸末期から明治になってからのことである。文化元年（1804）吉田藩が御用筆匠として鈴木甚左衛門を京都から招いた。その後彼は吉田藩の学問所御用を勤め、四代目の子孫幸三郎のとき廢藩置県を迎え彼を中心として下級藩士の手内職で筆製造が行われたのではないかと考えられる。

そのなかの一人、芳賀次郎吉も吉田藩鉄砲組であり、傍ら筆製造の内職をしており、筆製造の将来性に着目し、江戸へ修業に出かけ、水筆の製法技術を身につけ帰郷した。本格的に筆製造に着手し、弟子入りした者に元藩士・川村喜佐太・永坂弥作・佐野重作らがあり、それらがそれぞれ独立し筆製造をおこなった。佐野は弟子をとり、その製法を教えて



その基礎を築いた。明治21年（1888）神明町に筆製造所を建て多くの弟子を育てて豊橋の隆盛に導いた。

### （7）温室栽培

豊橋の温室は、明治34年（1901）に北島町に住む中島駒次によって始められた。駒次は、『品物が少なく、珍しければ高く売れるだろう』と考えて温室で野菜を作る研究をした。山椒の栽培から始め、次にトマト、きゅうり、と進んでいった。明治40年（1907）には、温室を広くしてメロンの栽培に成功した。このころになると、近くの農家でも、温室栽培をする人が増えてきた。

大正時代になると、「北島の温室野菜」は市場でも有名になった。その後温室栽培が、豊橋を始め全国的に盛んになり、時を同じくして温室の建築の需要が増え、北島の(株)大仙は全国規模の業者になった。

## 3 明治中期から現代

ここからは、明治中期から大正時代、昭和初期及び戦中、戦後について、都市計画の沿革または建築構造物を通じて時代の背景を述べることにする。

明治10年（1877）に第八国立銀行が設立、同17年（1884）に名古屋鎮台で編成された歩兵18連隊が、翌年豊橋（旧吉田城址）に移営した。明治21年（1888）には、国鉄東海道本線〔同22年（1889）全線開通〕の豊橋駅が開設され、上传馬町から豊橋駅の設置された花田村西宿までの停車場通（延長330間、幅員3間）が開鑿された。この道路は、戦災にあうまでの豊橋でもっとも繁華な通りで、額ビル（現：カリオンビル）・帝国館（映画館）・大野銀行（廃業）をむすび常盤通といった。明治26年（1893）に「豊橋商業会議

所」創立、同30年（1897）豊川鉄道開通、同32年（1899）「安藤動物園」開園、同39年（1906）花田村と豊岡村を豊橋町に合併して、豊橋市制が施行された。この年煙草専売と税務署の設置、明治42年（1909）札木、上传馬町の遊廓が東田に移転・豊橋警察署新築移転、翌43年（1910）豊橋ガス開業・八町線開鑿、翌44年（1911）大手町線の開鑿・豊橋税務署新築移転、翌45年（1912）新停車場通（広小路）が開鑿された。

大正元年（1912）は、広小路通が（延長378間、幅員6間）出来て、その他豊橋市役所庁舎落成・豊橋郵便局新築移転・豊橋市立図書館も創立された。大正3年（1914）萱町線の開鑿、大正5年豊橋駅・豊橋（鉄橋）の竣工、同10年（1921）渥美電鉄が設立、同13年（1924）豊橋電気軌道が設立された。

昭和2年（1927）額田銀行ビル建設、愛知電鉄の吉田（豊橋）駅乗り入れ、同6年（1931）電話の自動改式・公会堂建設（八町）、同7年（1932）「市立豊橋病院」開院（松葉町）・丸物百貨店豊橋支店開店、同10年（1935）花田跨線橋完成、同11年（1936）下水道工事竣工・絹田ガードが完成した。

昭和20年（1945）6月20日の米軍の空襲は、128万6,155坪にわたって全戸数の70%（16,886戸）を全焼または全壊させ、全人口の50%（71,502人）を罹災させ、624人の戦災死と344人の重軽傷者をだした。戦災は、古き良き時代の豊橋を一挙に破壊したが、敗戦は、軍事施設の開放をもたらした。旧歩兵第18連隊の兵舎は市役所や新制中学校に転用され、旧師団司令部あとに愛知大学が設立された。旧吉田城址と練兵場には、公園と野球場〔昭和23年（1948）〕・陸上競技場〔昭和24年（1949）〕などの運動施設が建設された。昭和25年（1950）豊橋駅が民衆駅第一号として建設され、同28年（1953）市役所庁舎建設、同30年

(1955)には町村の大合併（宝飯郡前芝村、渥美郡二川村・高豊村・老津村杉山村、八名郡石巻村・賀茂村）により面積253.38km<sup>2</sup>、人口202,985人、戸数39,481戸となる。戦後完成した駅前大通（幅員50m）は前田橋まで貫通するが、昭和33年（1958）、戦災復興事業の完了によって、駅前大通1～3丁目の町名が設定された。



昭和30年代の豊橋駅前

昭和30年代（1955～1964）は、日本が軽工業国から重工業国に転換した時代である。豊橋では、大日紡績（ユニチカ）が昭和26年（1951）、東都製鋼（トピー工業）が同32年（1957）、三菱レイヨンが同35年（1960）、神鋼電機が同36年（1961）に工場を立地した。昭和38年（1963）に東三河工業整備特別区域の指定、翌39年（1964）には三河港重要港湾指定を受け、東海道新幹線も開業した。さらに昭和40～50年代は好景気に恵まれ、公共施設も商業施設も次々と建設された。昭和40年（1965）豊川放水路通水、同44年（1969）東名高速道路豊川インターチェンジが供用開始し、同48年（1973）公有水面埋め立て地に明海町が設定された。

昭和34年（1959）には国道1号線が移設されて吉田大橋が架橋され、同36年（1961）には市内の交差点の信号が5ヶ所（広小路萱町・大橋通城海津・西八町にあったが、神明町・駅前大通萱町に増設）となり、同37年（1962）豊橋市八町通2丁目から豊川市国府町にいたる国道1号線9.5km（車道の平均幅員15m）が完全舗装して開通した。

昭和42年（1967）豊橋市民文化会館〔図書館〕開館、同45年（1970）豊橋子供自然公園〔動物園〕が開設した。豊橋駅周辺では、昭和43年（1968）名豊ビル建設、同45年（1970）新豊橋駅舎改築（豊橋ステーション(株)新築）、同48年（1973）豊橋丸物の豊橋西武への改称、同49年（1974）豊橋丸栄新築開店、同51年（1976）愛知県豊橋勤労福祉会館開館・豊橋技術科学大学創立開校、同54年（1979）豊橋市美術博物館開館、同55年（1980）豊橋市資源化センター・岩田運動公園・豊橋市地下資源館の建設と大型都市施設の建造が進められた。

昭和50年代（1975～1984）の後半、豊橋には中心部、郊外合わせてデパート、スーパーをはじめとしての合計16の大型店があり、売上面積過剰と認定され、昭和57年（1982）、売場1,500m<sup>2</sup>以上の大型店の新增設はできない抑制地域となった。しかし、この間中心部への大型店の進出は抑えることが出来たものの、郊外や近隣周辺都市に大型店が進出し、中心市街地の活性化が著しく損なわれ、魅力も薄らいでしまった。また工業においても戦後松葉校区にあった工場は廃業をしたり、郊外の広い用地に転出している。

（日本フード、アート編機、日工産業、石原産業、宮川工機、等）

年	卸売業	小売業	製造業
昭和51年	148	315	—
54年	120	309	132
57年	122	299	74
60年	116	274	60
63年	118	266	51
平成3年	108	246	48
6年	102	217	46
9年	87	194	37
14年	80	169	29

- \* 卸売業・小売業は「商業統計調査結果」による
- \* 製造業は「工業統計調査結果」により、昭和55年までは全数、それ以後は従業者数4人以上の工場



松葉校区を坂によって二分すると、南の町は商業地区であり、北の町は工業と農業と住宅地で、松葉1丁目～3丁目、石塚、特に上伝馬、本町通は昔、東海道34番目の宿場町であり、豊橋駅から常盤通りを通過して上伝馬から本町、札木、八町から18連隊を結ぶ道路は、明治の末から大正、昭和の初めまでは、豊橋一の繁華街であった。

商店をはじめ、料亭、待合、旅館（ゆたか旅館、中島屋、大黒屋、梅鉢屋、米善、志那乃屋、等）、飲食店（篠島屋、きく宗、有楽軒）、映画館（帝国館が第一東映、メトロ劇場、キネマパー、豊橋劇場、有楽館）があつて兵隊さんが休みの日とか、親、兄弟が面会に来たとき町が賑やかになった。

北島、南島町、船町、湊町は豊川の河口であり、昔から奥三河の木材の集散地で、豊橋周辺は、川幅の半分以上が木材の貯木場になっており、その関係から木材問屋、木材の加工業者が多く、戦後は、建築ブームで好景気にわいた。その後木材港の建設が要望され、明海の三河港に4ヶ年計画で、昭和46年（1971）9月に供用が始まり、北米材を輸入するようになって豊川から木材が消えた。

また繊維産業の工場も、戦中戦後となかなか盛大であったが、化学繊維と開発途上国にシフトされ、廃業と倒産に追い込まれた。一方小売商業は、昭和50年（1975）を境に大型店は中心繁華街を離れ、新たに郊外型ショッピングセンターの進出があり、中心市街地の小売商業界は商圈が大きく変わり、小規模小売店の来客数・売上減を招いた。豊橋商工会議所と共に小売商業者の幹部が会議を度々開催して商業近代化計画の策定委員会を発足させ、「歩行者空間の創造」「地下駐車場の整備」「街区の整備（電線の地中化）」「案内板、標識の設置による歩行者の誘導」など進めた。

バルブ景気がはじけた平成4（1992）～6

年（1994）頃ますます郊外への大型店の進出は続き、豊橋市は、同12年（2000）8月に第4次豊橋市基本計画を策定し、その中に第一番に中心市街地の活性化を取り上げて、その区域をきめ、松葉校区、松山校区、新川校区、八町校区が範囲となる。主要施策は、「東口駅南地区都市拠点開発事業」「こども関連施設等（旧市民病院跡地）の建設」「総合文化学習センターの建設」「TMO事業（株豊橋まちなか活性化センター）への支援」「広小路再開発と都心居住の促進」「電線共同溝整備事業」「路面電車活性化の促進」等により、今後当松葉校区は人口も増加し、商業も活性化して、戦前の町の賑やかさを取り戻してくれるものと思う。

### 第3節 校区の活動

#### 1 防災訓練

校区として子どもたちとともに防災訓練を始めたのは、平成14年（2002）8月のことである。松葉小6年生の総合学習で、防災訓練宿泊体験活動を行った。「東海地方に大地震発生。震度6弱、豊橋全域に多大な被害発生」を想定し、避難場所となる松葉小学校に避難。そこから「生きるための知恵や体験を積む」活動が展開された。子どもたちは学習をすすめるなかで、松葉校区の防災組織にも関心をもち、松葉校区民として避難時にどう対応したらよいかを学びたいという思いを持った。これに呼応して校区総代会は、校区としても防災組織及びその任務や役割等についての再構築を図り、自主防災会の活動を子どもたちに見せたいと考えた。

こうして始まった『松葉防災訓練—命を守る知恵と連携を学ぼう—』は、毎年、6年生の子どもたちの学習と連携をとりながらより実際の対応に即した訓練になるように改善さ

れ、今年で5年目を迎える。この間、新潟中越地震や仙台の地震など、いつ東海地方に地震が発生しても不思議はないことを実感させる現象が起きている。

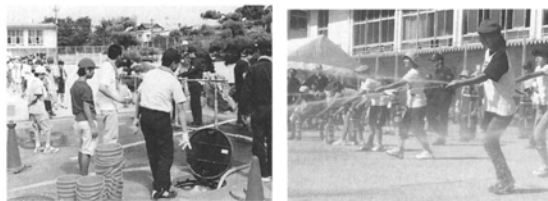
平成15年には、市の防災対策課や保護者代表、総代会、消防署の方によるパネルディスカッションを実施。宿泊時には、戦争中の三河地震や東南海地震の体験をお年寄りに語っていただいた。また、子どもたちの抱いた豊橋市の地震対策の疑問に対して、直に答えていただく公開学習会、保護者に対する防災引き取り学習会も実施した。その次の年には、防災マップを作成。校区の人に対して発表会をもった。



平成17年（2005）は「自分たち小学生もいざというとき、校区の人に混じって役に立つ働きをしたい。」という思いを受けて、防災訓練の内容を子どもも大人も一緒に訓練するよう方向を変えた。子どもたちは、消防分団員に非常用簡易水道の組み立ての現地指導をうけたり、各町内からお年寄りと一緒に危険を避けながら避難する体験をしたりした。また、おかあさんたちとのおにぎりの炊き出し、一人暮らしの方や高齢で外出もままならない方に防災の話をしてまわるお手伝いなど、いざというときに校区の一員としてどう行動したらよいか貴重な体験をすることができた。

平成14年（2002）から、消防署の協力を得て、グラット号による震度6のゆれを体感、応急手当体験、消火器による消火訓練、また

自分たちの手作りで、あかりづくり、水を濾過する装置づくりなどは継続して行っている。子どもたちの調べ学習の発表や広く校区の人々への発信も、その子どもたちの学習状況によって内容は異なるが、毎年行い、防災マップも更新されている。



## 2 わくわくサマーホリデイ

平成8年（1996）、松葉小100周年の時に初めて開催された。昼間はプール。夜は盆踊りと出店を楽しむイベントである。校区の子どもからお年寄りまでが参加し、親子のふれあいや地域の人々の連携を深めるイベントとして、毎年皆が楽しみにしている。総代会・PTAを中心として始まったが、今ではPTAの模擬店をはじめ、校区の体育委員会、子ども会、老人会など各種団体の人々もヨーヨーつり、キックターゲット、グランドゴルフなど様々な企画をして子どもたちを楽しませている。また夕方からは、女の子のゆかたの着付けもあり、盆踊りも年々にぎやかになっている。

平成16年（2004）から、松葉小音楽部・カラーガード部の出演が始まり、翌17年（2005）には、わくわくサマーホリデイ10周年のお祝いに花火を打ち上げ、大盛況であった。

## 3 子ども見守り隊

平成17年（2005）7月、「松葉校区子ども見守り隊」を結成した。豊橋市より依頼があり、モデル校として市内5校区で実施したもので、



健全育成会の内部組織として位置づけられた。

見守り隊は、隊員および協力隊員で組織し、隊員は日々のパトロール、協力隊員は日常生活の中で啓発活動などを行うこととしている。松葉校区では、月曜日から金曜日まで、曜日ごとの隊を編成し、下校時間を中心に校区をパトロールしている。

同年度は町組織や老人クラブ、各種団体などから7部隊が編成され、見守り隊の活動を行った。協力隊員はPTAが中心となり、「松葉小」という腕章をつけて下校時間に家の付近の交差点に立ち、子どもの安全を見守っている。また、「子どもの安全パトロール」というステッカーを作成し、自動車や自転車に掲示して、啓発に努めている。

## 4 市民館活動

昭和50年代（1975～1984）の中頃から、校区民が歩いて出かけ気軽に利用できるようと、各校区に市民館が建設された。松葉校区市民館も建設は早く、昭和55年（1980）に松山校区などと同じ頃に建設された。完成した当初から利用申し込みが殺到したと聞いている。2階建てで、研修室、集会室、和室、そして実習室、図書館も併設されている。館長1名、主事2名で業務を行い、校区の会合はもちろん、各種団体の会議や趣味の会を始め、お稽古の集まりなどで常に申し込みがいっぱいであり、盛況である。利用統計報告書によると、来館者は延人数で年間2万人を超え、毎日55人以上の市民が利用していることになる。

松葉校区では、平成9年（1997）11月に第1回の市民館祭を行い、以後毎年11月に開催。平成18年度（2006）は第10回目となり、節目の年である。芸能部門と作品展示部門にわけて部屋を飾り付けて行うのであるが、年々歳々、応募者も作品展示も多くなり、会場が

もう狭い感じがする。

これからは、市民館の運営の仕方も変わり、従来の管理委託制度から指定管理者制度へと移行する。校区市民が満足し、より一層市民館が利用されることを期待したいものである。

## 5 各種団体・委員会の活動

ここでは、校区の各種団体及び委員会の代表の方々に、その活動内容や校区に対する思いなどを述べてもらうことにする。

### (1) 体育活動

体育委員会は、17の町内会から選出された委員（各1～3名）と校区の体育指導員2名で構成されている。「いい汗、いい笑顔」をモットーに、校区のスポーツ振興と各大会を通じて校区民同士の親睦を目的に活動している。以下に具体的な行事内容を紹介する。

昔は、秋にも開催していたが、春だけの年1回になったソフトボール大会が5月頃に行われる。幅広い年齢層の選手が参加する大会なので、試合や応援する中で世代間の交流が随所に見られる。

ソフトボール以外の競技会としては、12月頃のソフトバレーボール大会、2月頃のドッジビー大会がある。競技種目は年々見直して、より多くの人が参加できるように心がけている。競技大会以外に、校区にあるクラブチーム（野球、ソフトボールやバレーボールなど）が、市大会へ参加する時の応援も体育委員会の重要な活動である。また、ニュースポーツ講習会や夏休みラジオ体操を実施して、スポーツ振興を図っている。豊橋市民運動会とも言える秋のスポーツフェスタ陸上大会では、百足競争、玉入れ、玉送りなどの種目に参加している。成績は振るわないが、秋の楽しい一日となっている。

その他に、松葉防災訓練や、校区の夏祭り「わくわくサマーホリデイ」等の行事に参加している。これらは、子ども会や松葉小PTAとの共同行事であり、これからも、このような他の団体との連携を強化して、競技会や講習会の内容を充実していきたいと考えている。

## (2) 社会教育活動

正式には〇〇校区社会教育委員会と言うが、一般的に「社教」と呼ばれている。市内には51校区の各校区社教団体がある。わが松葉校区社教は各町より任命された約30名の委員より構成されている。

「社教」の理念として、地域の社会教育の推進とコミュニティ活動の振興に努めると共に、各種団体間の連携を図ることによって地域の連帯感を育て、「地域の指導者の養成も図る」等の意義を保持し各校区で活動する実践組織である。

年間活動の中心的行事である成人式は、毎年1月の第2日曜日に開催される。松葉小学校の体育館にて午前10時半より正午位までかけて式典及び懇親会が執り行われる。我々社教委員にとり、成人式が大過なく終わると、やはりほっとするものである。

成人者の把握、記念品の選定、案内状の送付、学校の協力を得て前日の会場設営等々、細かなことも色々ある。20歳の祝いで体育館に参集した新成人たち。思い起こせば、ほんの8年前にこの体育館より巣立った若者たちが大きくなり、それぞれの思いで出席している。来賓も我々も往時に思いを馳せる幸福な一時でもある。決して華美ではなく、むしろ質素な式典ではあるが、新成人にとり、後々まで記憶に残る成人式であったならば我々校区社教委員にとり大変うれしいことである。

社教委員は全くのボランティアで、それぞ

れが仕事をもっており、その間での活動となる。私は楽しくできるという事が大事と考えている。今後も校区の人々が積極的に参加くださると素晴らしいと思う。

## (3) 青少年健全育成活動

活動を担う豊橋市少年愛護センターの補導委員は高校、中学、小学校、中小PTA、校区指導員、保護司、児童委員、更生保護女性会、警察他、397名が1年単位で市から委嘱される。校区指導委員は2年任期、再任も認めている。

センターの基本方針は、ボランティア活動を行う各種の協力団体の中核となり、組織的な活動を図ることで、少年愛護の精神を貫き、補導活動、少年相談、環境浄化活動を通じて青少年の非行防止と健全育成に努めることとしている。

地域合同補導は、中学校校区ごとに集まり、毎月1回の予定で行っている。各小学区指導員1名、小中学校PTA、更生保護女性会、児童委員、見守り隊(市)、中小生徒指導員が八町市民館に集まり、少年愛護センター職員による健全育成の話や学校・地域の近況などの報告をして意見交換している。その後、各地区に別れて、学生生徒の集まる場所などを巡回し、万引き等の防止や街頭補導を行っている。そのほか、市の張り紙等違反広告物除去活動員制度による、活動員の講習を受け、校区内でも違反広告物除去などの活動を行っている。

## (4) 防犯活動

1年間の主な活動は、6月の夜店の警備と年末の特別警戒がある。

夜店については開催期間中の豊橋公園内の警備が主な活動であるが、警備本部における各種団体の受付け業務や出席帳簿の整理など



も担当している。豊橋の名物で夏の風物詩でもあり、毎年たいへん賑やかであるが、各種団体役員の方も多数出席し、平穩無事終了すると、ほっとできる。

年末は毎年、「年末特別警戒」として恒例の夜間パトロールを実施している。会員12名に更生保護婦人部20名の応援を受けて、「暴力、暴走族、虐待を見たら110番通報を」「寝る前には火の元、戸締りを忘れぬように」などと呼びかけを行う。

総代の方々を始めとして、暴力や急増する車上狙いなど、さまざまな犯罪を未然に防ごうと校区民上げて活動を展開しているが、パトロール中に住民の方から「ご苦労様です」と掛けられるねぎらいの言葉がなによりの励みである。

犯罪が少しでも減少し、松葉校区が安心して住みよい町になることを祈っている。



### (5) 子ども会活動

子ども会の結成は昭和26年（1951）であり、現在の役員数は27名で活動している。

平成17年度（2005）の主な子ども会の行事は、以下のとおりである。

#### <松葉校区球技大会>

松葉校区では各校区の3年生から6年生の男子がソフトボール、女子がフットベースボールで競技を行っている。

早朝6時から始まる登校前の練習も積極的に行い、一生懸命練習し本番に臨んでいる。

雨が降ってグラウンド状態が悪く練習がほ

とんど出来ない状態であっても、子どもたちが率先して練習をしようと集まり、少しでも上手になろうと努力する光景を見たこともあった。男子も女子も毎年しのぎを削って競い合い、学校の運動会に勝るとも劣らない熱気が漂っている。優勝したチームは涙を流す子どももいるくらいである。

また、校区内で優勝するとブロック大会があり、他校区の代表と戦うことになる。ブロック大会に備え、毎週松葉小学校で練習するが、厳しい練習を自分たちから求め、「絶対勝ちたい!」という気持ちがみなぎっていた。練習に立ち会う子ども会役員も、子どもに圧倒され、子どもに混じって練習をし、一緒に汗を流す毎日であった。残念ながら、男女とも良い成績を残すことが出来なかったが、本年開催が松葉校区であったこともあり、大変白熱した応援が飛び、とても良い経験が出来た球技大会であった。



#### <豊橋市子ども会綱引き大会>

毎年好成績を残す恒例の豊橋市子ども会の行事である。毎年ほんの3回程度の練習にもかかわらず、一生懸命頑張って今年も良い成績がのこせた。

最も寒い時期に松葉小学校の体育館を借りて練習するのだが、学校生徒の1/3以上が参加し、寒さを忘れてしまうほどの熱血ぶりで、寒いにもかかわらず汗を流し綱を引く姿がとても好印象である。

子どもたちの一生懸命ぶりはやはり成績に影響するようで、合計8チームのうち4チー

ムが決勝リーグに残り、優勝2チーム・準優勝1チーム・3位1チームという大変素晴らしい成績となっている。毎年必ずライバル相手となる杉山小チームに勝たないと優勝の道が閉ざされると言われており、接戦ではあったが2チームとも杉山小に勝って優勝することができた。杉山小子ども会も松葉小子ども会を最大のライバルだと言っている。

#### <6年生を送る会>

本年は昨年と同じくボーリング大会を行った。ルールはガーター無しとし、2ゲームの戦いである。普段ほとんどボーリングをやったことの無い子どもも、ガーターが無いことで気軽に楽しめ、大変盛り上がった。

ボーリングの後は、各自好きな食事と飲み物を予約してあり楽しそうに食べていた。

食事後に成績を発表したが、いざ優勝の発表となると、今まで騒がしかった子どもたちが一瞬静まり返り、いったい誰なのか？興味津々といった雰囲気であった。

あいにく外は大荒れの天気で肌寒い日であったが、終日屋内と言うこともあり、滞りなく行えたうえ、大雨が降っていることも忘れてしまう程の熱気で、あつというまの一日であった。

#### (6) 敬老会活動

市制100周年に当り、高齢者社会を迎えこの機会におのれの生き様をみつめることもよいと思う。高齢者の知恵や工夫、経験等を生かして地域文化の伝承や健康づくり活動、生きがい活動、自然や災害に対しての防災活動等を通して、次世代との交流を深め安全と安心への結びつきとなって、よりよい街づくりにつなげたいと思っている。また、一人ひとりの教養を高め、好かれる老人になってほしいと思う。この思いの中であって行動し、長寿社会を発展させていくことが重要であると

思われる。

松葉校区老人クラブ連合会は昭和60年(1985)10月1日、15町内をもって(規約を定めて)発足し、現在22年目を迎え、平成18年度は、次の8クラブが活動しており、会員数は男232人、女318人、合計550人となっている。

活動内容は年間を通じて次の三つの運動を根幹として実施されている。

「健康をすすめる運動」

「在宅福祉を支える友愛活動」

「一斉奉仕活動(社会奉仕の日9月20日)」

以上の事項を推進するために実践として、次のことを計画している。

- 松葉校区高齢者福祉大会、100周年記念事業として三世代交流演芸大会開催(11月3日)
- ねたきり老人の友愛訪問(年3回)
- 一人暮らしの方への一声運動
- 子ども(松葉小学校児童)と高齢者との手紙での交流 など

#### (7) 献血活動

献血が始まったのは昭和40年(1965)頃、絹田の方で血液が必要となり、当時の総代さんが「これからは必要なことである。」と判断されて、当時は「預血」という言葉で始められた。以後絹田のグループによって続けられ、昭和58年(1983)校区の社会福祉協議会保健衛生部会により、7月に絹田グループ、9月に校区と、分かれて行われた。平成5年度(1993)より松葉校区として行われるようになり、平成10年(1998)より地域福祉部会の事業の一つとなった。平成9年(1997)と同17年(2005)には表彰も受けたが、近年では若い人の参加が少なく、健康状態もあまり良くないので、献血できる人の数が少なくなっている。



## 第3章 教育と文化

### 第1節 学校教育、保育

#### 1 小学校のあゆみ

##### (1) 寺子屋での教育

明治5年(1872)に学制が公布されるまでの教育は、武士の子は藩校で、庶民の子は寺子屋で行われていた。寺子屋では、教える者を師匠、ここに通う子を筆子とか寺子と呼んでいた。当時は7歳か8歳になると寺子屋に入学した。男子が主で、女子は少なかった。松葉には関屋町の悟真寺、湊町の神明社の他にいくつかの寺子屋があった。寺子屋で教えていた学科は、読み書きそろばんといわれるが、多くの寺子屋では手習いが中心であった。この寺子屋は、明治5年(1872)の学制公布、翌6年(1873)の寺子屋廃止の通達まで続いた。

##### (2) 学制公布と第1番小学校関屋学校

日本の近代的な教育制度は、明治5年(1872)8月3日に公布された「学制」から始まった。文部省は、続いてその年の9月8日に「小学教則」を公布し、小学校における教育課程及び教授方法の基本方針を明らかにした。愛知県では、明治6年(1873)12月に「愛知県小学規則」を制定し、翌7年(1874)1月公布した。それによると下等小学の教科は、読物・問答・書取・作文・算術・習字・復読であり、上等小学の教科は、読み物・輪講・作文・暗記算術・習字・罫画となっている。

松葉では、明治6年(1873)10月15日に悟真寺の庫裏を校舎として関屋学校が開校され

た。そして、明治9年(1876)2月には、湊町神明社の社務所を校舎とする豊水小学校(同年9月に三町学校と改称)が開校された。その後、明治26年(1893)までは、数年おきに校名が変わったり、統合分離が繰り返された。

##### (3) 松葉小学校の開校

明治26年(1893)にできた豊橋第三尋常小学校は、西八町に本校があり、船町に分教場があった。明治29年(1896)に新校舎が松葉町に建てられ、その時に分教場はなくなった。この年を松葉小学校開校の年としている。開校の年の児童数は743名、初代校長は、西岡禮氏であった。この後、明治32年(1899)に「豊橋西部尋常小学校」と名前を変え、同40年(1907)3月1日から「豊橋市立松葉尋常小学校」とさらに校名が変わった。ここに初めて「松葉」の名が付けられたのである。

##### (4) 義務教育6年制の成立

明治40年(1907)の小学校令改正によって、尋常科6年、高等科2~3年とし、教育年限が6ヶ年に延長された。これは、明治37年(1904)・38年(1905)の日露戦争後の整備・拡充の政策と関連をもって実施されたもので、我が国の初等教育史上画期的な改革であった。松葉では、そのため、800人ほどであった児童数がこの年1,186名の大規模校となった。

##### (5) 大正時代の松葉小学校

松葉に限らず、豊橋の学校では、4月から

9月の夏季は午前8時始業、午後2時終業、冬季は8時30分始業、2時30分終業であった。登校すると、校庭で全校朝会があり、級長の号令で整列をしたあと、教育勅語の奉読、校長の訓話があった。朝礼が終わると教室で授業が始められた。授業時刻の合図は手振りの半鐘で、時刻になると使丁が鳴らした。

児童机は二人用が多く、高学年になるにしたがって個人用の腰掛けに変わったが、個人用の机はまだなかった。低学年は、ノートや鉛筆を使わず、石盤に石筆で書き、羅紗で拭いて消し、何度も使った。教科書などの学習用具は風呂敷に包んでいたが、大正の中頃から肩掛けのブック鞆が使用されるようになった。

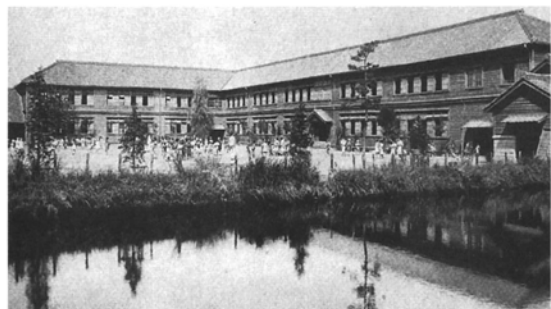
授業科目は、修身・国語・算術・日本歴史・地理・図画・唱歌・体操・裁縫（女児）であった。また、休まずに登校すると、皆勤賞の賞状がもらえた。賞状には雑記帳1冊とあり、賞品としてもらえた。

この頃の子どもは、学校へ行くとき、ほとんどの子が着物を着て、三尺帯を締めていた。冬には綿入れの羽織を着た。頭髪は、男子は坊主頭に学生帽、女子は長髪で三つ編みやお下げ髪であった。履物は、白い鼻緒のゴム裏の草履か低い日和下駄を履いた。洋服を着てくる子はほとんどいなかった。式の時は、羽織・袴であった。

## (6) 新校舎移転

大正11年（1922）1月2日、午前10時より新校舎竣工式が挙行され、松葉尋常小学校は現在の土地に移転した。木造2階建ての立派な校舎が完成したのである。今の守下公園の場所は養魚場であり、北側に安藤動物園があった。移転した松葉尋常小学校の周辺は、まだまだ人家の少ない地域であった。大正10年（1921）の沿革史には、移転に際して「勅語

膳本ハ校長之ヲ奉ジテ第一ニ奉還ス」と記録されている。勅語とは、教育勅語のことであり、当時の時代背景がうかがえる。また、4年生以上の児童が机などの教材教具を運び、移転したことも沿革史に記録されている。当時の豊橋日日新聞は「工費17万余円の松葉新築校開校式、盛大に挙行」と大見出しで掲載し、「本市の理想的小学校である」と最大の賞賛を贈っている。



新築移転された小学校

## (7) 豊橋ラジオ放送

大正末期になると、国産の映画やレコードが作られるようになり、「流行歌」が全国に流れた。そして、大正14年（1925）には、ラジオ放送が開始された。NHK名古屋ラジオ放送局（当時は社団法人名古屋放送局）は、同年7月から放送開始。豊橋市では、同年10月29日を豊橋放送デーとし、松葉・八町・新川・狭間各学校の代表児童8名を含むプログラムを名古屋放送局から放送した。松葉からは4名の児童が参加し、合唱「糸繰る少女（おとめ）」と童謡「青い鳥」を歌った。

## (8) 昭和初期の教育

### ① 奉安殿と御真影

各小学校に御真影・教育勅語が下賜されたのは明治後半で、そのころから君が代の唱和や御真影の拝礼、勅語の奉読が学校儀式として定着した。御真影・勅語の管理は実に厳しいものであった。

昭和2年(1927)、渥美郡内での紛失事件をきっかけに、従来の校舎内の奉安室から、校庭内の独立の施設として奉安殿が設置された。鉄筋コンクリートの頑丈豪華なもので、木造建築が殆どであった時代に、県下一斉に造られたことから皇室崇拝の教育が当時の教育思想であったことがうかがえる。本校でも、昭和3年(1928)10月、奉安殿ができあがり、竣工式挙行と同時に御真影拝戴式も行われた。低学年、高学年に分かれて式を挙行了した後、一斉に万歳を唱えたと記録されている。

## ② 記念日の行事

昭和4年(1929)5月25日の海軍記念日には、記念事業として、第1時各学級訓話、第2・3時体操会、第4時町別リレーが行われた。同年3月10日の陸軍記念日には、訓話の後、1年賢養院、2年龍雲寺、3年別院、4・5年陸軍墓地、6年陸軍墓地及び水源地へそれぞれ分かれて、戦病死者の墓参をしている。

## ③ 水練会

松葉尋常小学校の水泳は、豊川で行われた。毎年10日間を決めて豊川に出掛けた。泳力によって白赤黄青黒に色分けしたはちまきをし、その色によって泳ぐ場所が決まっていた。6年になると江比間や新居、三谷の海岸で臨海教室が実施され、有志が参加した。大きな部屋に寝泊まりして、林の中での学習会、地引き網の見学、夜は船からの夜光虫観察会など、子どもたちは楽しく過ごした。

## ④ 学区の拡大と子どもたち

昭和7年(1932)豊橋市と合併した北島地区が、翌8年(1933)に学区に加わった。当時の地図によればまだ集落も少なかった。

大正の頃はほとんど着物だった子どもたちの服装も、昭和に入ってちらほら洋服が見られるようになった。女子のセーラー服が制服となるのは、昭和9年(1934)ころであった。



昭和9年入学児童

## (9) 戦時下の教育

### ① 松葉国民学校の発足

昭和6年(1931)の満州事変以後、日本の教育は戦争の影響を受けるようになり、同12年(1937)、日中の全面戦争が始まると、学校生活にも戦争色が強まってきた。昭和16年(1941)4月、従来の教育を改め、戦時体制に対する教育の一環として国民学校が発足した。



国民学校のころの松葉小学校

この国民学校教育実践のため教師の再教育も行われた。教育の国家統制が強化され、教科書も大改訂された。新しい教育目標(「皇国ノ道ニ則リテ」、国民の「基礎的錬成」を行う)に基づいて編集された。国語をはじめとして各教科の教科書も当時の社会体制と思想を強く反映し、戦時色が濃いものになっている。学習評価についても、これまで甲・乙・丙であったが、国民学校になってからは、優・良・可の3段階となり、優と可は学級の2割、良はだいたい6割と基準が定められた。

### ② 豊橋空襲と校舎全焼

戦争が激しくなってくると、松葉小学校で



も待避壕を造った。沿革史には、昭和18年(1943)9月16日、待避壕掘り出し作業開始が記録されている。昭和20年(1945)3月以降、米空軍B29は波状的に本土空襲を繰り返した。同年6月20日午前零時40分、ラジオが鳴り出した。「東海管区情報」の声に続いて「東海管区空襲警報発令」と何度か繰り返された。と同時に、空襲を告げるサイレンが夜のしじまを破って鳴り響いた。午後11時米軍機B29約90機来襲。焼夷弾投下により、全市大半火の海と化し、翌20日午後3時頃までに松葉国民学校校舎・校具・学籍をはじめ重要書類が全部消失した。残ったものは、正門の柱(現在の北門)と、奉安殿のみであった。

### ③ 児童の疎開と分散授業

児童の疎開は、食料事情などにより親戚を頼っていく者が多かった。罹災前に2,112名であった児童数が7月3日の時点で367名となっている。この日より分散授業が始まった。校舎の定まるまで分散して授業をした。本部は関屋町の集会所におかれた。9月以降、5・6年生は市内花田国民学校の講堂を借用し、授業が行われた。警戒警報や空襲警報が頻発したため、休業することが多かった。8月15日、無条件降伏。ポツダム宣言を受諾し、終戦となった。松葉国民学校は、昭和20年(1945)11月22日現在、児童数は920名。疎開先からの復帰者が多かった。



## (10) 戦後の教育

### ① 新しい松葉小学校

敗戦によって戦争中の教科書の中から軍事教材や超国家主義的教材などが削除されることになった。これが占領下の「墨ぬり教科書」である。戦争中、神聖なもの、絶対的な権威あるものとして取り扱われてきた教科書に対して墨をぬり、切り取るなどしたことは、当時の教師にとっても児童にとっても忘れることのできないことであった。戦後の新しい教育制度は「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに普遍的にして、しかも個性豊かな文化の創造をめざす教育」という趣旨に従って、昭和22年(1947)3月に公布された教育基本法によって具体的な方向が示され、同日公布された学校教育法によって具体的内容が与えられた。

この中で特筆されるのは、義務教育が小学校6年とさらに3年の延長が図られたことである。それが新制中学校である。これによって、従来の高等科が廃止された。教育の新しい制度として六・三制教育が発足したのである。また、男女共学の実施も大きな改革であった。教育の男女均等を実現する基礎となった。この制度の実施により「国民学校」の名称は消えることとなり、明治以来国民に親しまれてきた「小学校」にもどることになった。昭和22年(1947)4月1日、松葉国民学校は、豊橋市立松葉小学校と改称された。

### ② 城海津地区の編入そして新校舎づくり

昭和24年(1949)12月31日、豊橋市立狭間小学校廃校に伴い、その多くは松山小学校に編入となったが、同校通学区域のうち、花田町字城海津、鉄道線路以東が同25年(1950)1月1日より本校区に編入となった。終戦で四散していた児童の多くが再び学校に戻ってきた。昭和21年(1946)1月28日より元18連隊兵舎(現在の豊城中学校)を仮の校舎とし

て授業が再開された。兵舎そのままの校舎において、豊城中学校・下地小学校・桜丘高校などの学校の児童生徒も一緒に学習した。

昭和24年（1949）3月、待望久しかった新校舎が完成し、6年生の4学級と1年及び2年の一部が新校舎で授業を開始した。その後、工事が継続。昭和27年（1952）には給食倉庫、同31年（1956）給食調理室、宿直室、小使い室、玄関前の庭や運動場南の扉なども造られた。

昭和32年（1957）、校地の東側（現在の体育館）に講堂が完成し、翌33年（1958）には、ピアノ披露も兼ねて講堂披露の音楽会も行われた。プールは昭和35年（1960）、現在の位置に完成し、夏には元気な水しぶきがあがるようになった。

### ③ 学校行事の復活

昭和23年（1948）から、運動会、学芸会、修学旅行、遠足といった学校行事が復活し、パン給食もはじまった。昭和25年（1950）に校歌が制定された。当時、本校の教員であった鈴木文一先生が作詞・旋律、学芸大学（現在の愛知教育大学）の永見貞三先生の補修・編曲によるものであった。歌詞の中には「理想」「平和」の文字も見られ、当時の子どもたちへの願いも感じられる。

校歌	
一	青いみ空に 姿とおどく 松のみどりに かこまれて 清い流れの 豊川に
二	そい立つ 松葉の小学校 かがやく伝統 うけついで おどる心に 理想をえがき 強く正しく 伸びていく
三	朝日てりそう 学びの庭に 平和日本の 鐘がなる いざ進まん 手をとって われら 松葉の小学生

### ④ 鉄筋校舎建設と施設充実

戦後の復興の時代から高度成長の時代に入り、教育の充実とともに施設・設備の充実にも力が入られた。昭和40年（1965）校舎改築委員会結成準備会にはじまった校舎改築は、

同42年（1967）に第1期の校舎鉄筋化が開始され、同44年（1969）までに北校舎の東半分が完成。校舎改築委員会ではさらに学校施設についての要望をまとめ、市に陳情を行った。学校の設備充実を図る活動のひとつとして卒業制作があった。昭和39年（1964）には教材園を兼ねた「池」を、翌40年（1965）にはPTAの協力を得て「岩石園」を完成させた。

このような学校づくりの中で、学校を整備する努力が認められて、昭和42年（1967）7月、学校整備優良校として文部大臣賞を受賞した。その後も、足洗い場、遊具の設備充実、うさぎ・鶏小屋、体育館倉庫など、諸設備の整備は行われ続けた。

## 2 小学校の活動

### (1) 運動会・スポーツ

明治時代の運動会は、いくつかの学校と連合して行っていた。春と秋の年2回開かれ、牛川原や高師原、豊橋練兵場などで行っていた。大正から昭和初期にかけて、松葉小学校はスポーツが盛んであった。大正11年（1922）、八町練兵場グラウンドで東三河少年野球大会が開催され、決勝戦で狭間尋常小学校を4対3で下して優勝した。翌大正12年（1923）も東三大会に優勝し、名古屋市で行われた東海大会にも優勝した。昭和6年（1931）8月には、京都で行われた全国少年野球大会に出場し、優勝している。昭和8年（1933）に野球は中止されたが、陸上競技において好成績を残している。市内、東三、県大会において数多く優勝し、優勝旗は100本余りもあった。昭和13年（1938）には、剣道部が創設された。この年は市内3位であったが、翌14年、15年、16年と3年連続優勝した。このほか、新愛知新聞社主催長山学童剣道大会、東海学童剣道大会などに優勝している。



全国大会に優勝した野球部ナイン

## (2) 修学旅行・遠足

明治43年(1910)に狭間・新川・松葉の3校が合同で、名古屋に行った記録が残っている。男女が別々に出発して3泊している。大正時代は、名古屋・伊勢方面に出かけている。昭和の初期は、1泊2日で伊勢に行くコースが一般的であった。遠足は、吉崎海岸や石巻山などであった。昭和初期には、鳳来寺山などにも出かけていた。戦後は、昭和23年(1948)に修学旅行が復活し、日帰りで静岡の久能山に登っている。昭和25年(1950)から同30年(1955)まで、京都・奈良となり、同31年から伊勢・鳥羽に行っている。昭和40年(1965)までは、伊勢方面、翌41年(1966)からは、奈良方面に多く出かけている。



昭和15年度修学旅行

## (3) 母の会・PTA

明治34年(1901)11月、第1回母の会が開催された。この時出席した会員は450名余り、来賓は23名と盛会であった。当日は、学芸会を行って、出席者に披露した。翌35年(1902)からは、年2回開かれていた。昭和22年(1947)4月6・三制の発足に伴い、「PTA」

が結成され始めた。本校においては、昭和23年(1948)5月、PTA総会を開き、「松葉小学校PTA」を発足させている。昭和39年(1964)6月、父親学級が開催され、児童、教師並びに父兄の総理解を深める上で大変有意義な催しであったとして好評を得ている。

## (4) 教育研究

昭和26年(1951)県教育委員会から音楽科研究校として指定された。半年間研究を重ねて11月30日、その成果を発表した。市内はもとより県下各方面から多くの参観者が来校した。その年の暮れ、本校の楽器合奏がNHKラジオから放送されている。



JOCK放送記念

昭和54年(1979)市教育委員会から視聴覚教育の研究校として、委託を受けた。自主性のある児童の育成を目指したもので、社会科、理科、家庭科、道徳の分野でそれぞれ主題を決め、研究を進めた。この年、本校を含め豊橋市内7会場で開かれ、全国から幼稚園、小・中学校の先生約3,000人が集まり、第32回学校視聴覚教育全国大会が開催された。本校の教育研究も高く評価され、昭和57年(1982)、日本視聴覚教育協会より奨励賞が贈られた。

平成7年(1995)、市教育委員会より特別活動の研究拠点校に指定された。研究主題「たくましく生きぬく力を育てる特別活動～一人一人のよさを発揮し、みんなで取り組む学級活動を目指して～」を設定し2年間研究に取り組んだ。翌平成8年(1996)8月6・7日の2日間の日程で、第40回全国特別活動



研究協議会の愛知・豊橋大会が開催された。本校の林尚彦校長が大会実行委員長を務め、大山信子教諭が「NIEと特別活動」の分科会で5年生のNIE活動の研究実践を報告し、高い評価を得た。

### (5) JRC活動

昭和50年（1975）、恵まれない人々を助けたり、苦しい環境にもめげずがんばっている小中学生たちを励ますブルーバード中日賞で、激励賞に選ばれた。校区内の道路や公園の清掃を行ったり、寝たきり老人に手紙を出す、養護施設を訪問する、などの奉仕活動が評価された。昭和45年（1970）にJRC（青少年赤十字）に加盟し、VS（ボランティア・サービス）活動を推進していた昭和48年（1973）に続き2回目の授賞であった。



### (6) わかしゃち国体参加

平成6年（1994）10月第49回国民体育大会が、愛知で開催され、豊橋では市内23.4kmを9区間・9校による大会旗・炬火リレーが行われた。本校も選出され、6年生14人がリレーに参加した。

### (7) 学習発表会

平成14年（2002）、これまで「学芸会」として劇や音楽を発表してきたものを「学習発表会」と名称を変えた。劇や音楽など学年の発表は、総合的な学習や各教科で学んだこと

をもとに、学年のオリジナルな作品として発表した。そして、日頃クラブ活動や部活動で学習してきたことも、舞台や体育館壁面を使って発表することとした。また、茶道クラブは、家の人や地域のお年寄りを、昼の時間にお茶席に招待した。以後、この考え方のもとに、おはなし会の「読み聞かせ」やPTAの合唱・踊りの参加もあって、楽しく真剣な「学習発表会」を毎年秋に開催。家族や親戚などをはじめとして多くの人の参観を得て、子どもたちの励みになっている。



### (8) 幼・保・小連携活動

近年、小学校と幼稚園や保育園との連携・交流が盛んになっている。これは、就学前後の子どもたちの健やかな育成をよりスムーズにし、子どもの育成に携わる者が互いに理解を深めようとする活動である。松葉校区では、松葉保育園・くすみ保育園・悟真寺幼稚園・花園幼稚園など、近くの園の子どもたちと1年生がいっしょにヤゴ取り体験をしたり、昔の遊び体験をしたりしている。ヤゴは、家で育てて立派なトンボになったときの喜びを、家中で共有することができる。昔の遊び体験は、1年生が地域のお年寄りに教えてもらった、あやとりやたこあげ、めんこ、竹馬など、昔の遊びを学校や家で練習し、うまくなって、今度は先輩として年下の子に教えてあげようというものである。少子化のなかで、このように学齢の枠を越えて行う異年齢交流・三世

代交流は、松葉のよき学習環境のひとつといえよう。

### (9) 教科制の導入とT T指導・英語活動

平成15年（2003）、松葉小学校では、音楽と図画工作の時間を中心に、一部教科制を導入した。小学校では、基本として担任が全教科をもち指導にあたる事が多く、高学年においては主に技能教科を担当以外の教員が指導することもあるというのが通例である。松葉では、指導する教員の特性を大いに生かして、子どもたちによりよいものにふれて、質の高い教育を受けさせたいとの考えのもとにはじめたものである。担任学級以外の指導もするので、多くの教員がいくつもの学級に出掛けることになり、学級に指導者が複数いて（T T指導という）、きめの細かい指導をすることもできる。松葉の教育の重点目標である「6年間のスパンで」「全職員で 全児童を」指導する体制の核となるシステムである。また、平成18年（2006）豊橋市英語特区指定を受けて、松葉では全職員による全学級英会話の学習がはじまる。毎年陣容は少しずつ変わるが、この基本理念のもとに子どもたちの教育を全力で行っている。

### (10) 学校評議員制の導入・1日校長・学校評価

平成14年（2002）、松葉小学校評議員会が発足した。地域に信頼される「開かれた学校」として、松葉の教育活動を地域の日で評価していただき、よりよい教育活動をめざそうというものである。しかし、年度末に学校評価を依頼したところ、地域の方にとっては、学校教育の大きな行事はともかく、日常的な様子については的確に評価をすることが困難であるのご意見をうかがい、翌15年（2003）から1日校長として子どもたちと学校生活を

共にしていただくことにした。朝礼時の講話、授業を参観、昼は子どもたちと給食を食べ、会話をかわし、一日の終わりに職員に講話をいただくという方策は好評で、5年経過している。そして平成18年（2006）、松葉は文部科学省より豊橋市が受けた「義務教育の質の保証に資する学校評価システム構築事業」の指定校として、新川小、八町小、豊城中、中部中とともに学校評価の研究をはじめている。

### (11) マラソン大会と豚汁

毎年2月上旬、豊橋市の陸上競技場で全校生徒が寒風の吹く中、マラソン大会を行う。当日は各学年男女に分かれ、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんの温かい声援の中、最後まであきらめずに全員ゴールを目指して走る。がんばったあとはPTA役員がつくってくれた豚汁が待っている。大きな「はそり」で作った豚汁はとてもおいしく、子どもたちは何杯もおかわりをするほど。全力で走ったあとに心も体も温まる豚汁である。

### (12) 児童会活動「いつも主役はわたしたち」

平成7年（1995）の秋、運動会のテーマを「いつも主役はわたしたち」として、従来の教師が指導した内容を確実に発表しようとする運動会から発想を転換し、子どもたち自らの力で運動会を創りあげ、「生きた力」を身につけるための運動会にしようと考え、大いに盛り上がった。これ以降、この「いつも主役はわたしたち」というテーマは、松葉小学校のすべての教育活動を支えるスローガン（合い言葉）となり、運動会や学習発表会といった大きな学校行事をはじめとして、一年生を迎える会、松葉なかよしフェスティバル、感謝する会、各委員会や集会、卒業生を送る会など、子どもたちの創造する主な活動の支えとなっている。

### 3 同窓会と周年事業

#### (1) 70周年～90周年

松葉小学校同窓会は、昭和41年(1966)松葉小学校創立70周年のときに結成された。初代の同窓会長には、松葉町の深見保次郎さんが選任された。同年11月4、5、6日の3日間、同窓会発会式と70周年記念式典が行われた。同時に「同窓会名簿」と「創立70周年沿革抄」が発刊された。記念行事として、県警プラスバンド演奏会、児童作品展などが開催された。

80周年記念行事は、昭和51年(1976)11月6、7日の2日間で行われた。記念行事の一環として学校のシンボルである校旗が贈呈された。校旗は金銀の糸で織られたもので、現在まで引き継がれている。同窓会長は山田一男さんが務めた。

松葉小学校創立90周年及び同窓会結成20周年記念行事は、昭和61年(1986)11月8、9日の2日間で行われた。同窓会長には伊藤哲さんが就任した。前日祭の8日には、卒業生の清川正二さん(IOC委員)を招いて3年生以上の児童とPTAなどを対象に講演会が行われた。翌9日には、同じく卒業生の楠兼敬さん(トヨタ自動車副社長)による講演会が開催された。記念式典では、マーチングバンドとパトン部が、寄贈された制服を着て、金管バンド演奏を披露した。記念事業として、20年ぶりに卒業生17,900人収録の同窓会名簿を刊行した。



#### (2) 100周年記念行事

松葉小学校創立100周年記念行事は、平成8年(1996)11月9日、10日の2日間にわたり実施された。9日午前は、100周年をお祝いする会として、松葉小学校児童による発表会が行われ、唱歌や寸劇などを披露した。終了後、「輝け松葉—いつも主役はわたしたち—」と彫られた記念碑の除幕式を行った。午後は、校区民有志による芸能大会や防災食試食会などが行われた。



10日には、記念式典と講演会、演奏会が行われた。式典は、新しく同窓会長に就任した鈴木敏夫実行委員長の式辞ではじまり、前同窓会長の伊藤哲さんに顕彰状、永年勤続職員に感謝状が贈呈された。続いて卒業生の清水盛生さん(科学技術庁航空宇宙技術研究所)による記念公演が行われた。演奏会は、同じく卒業生の大岩紀栄さん(バイオリン教室主宰)とその仲間によって開催された。100周年を記念して「松葉小100年誌」が刊行された。編集委員長は黒川喜七さんが務めた。また、100周年を記念してスクールアート航空写真の撮影を行った。この写真を元に記念下敷きを作成し児童などに配布した。

平成18年(2006)、松葉小学校は、創立110周年を迎える。5月に20年前に埋められたタイムカプセルの開封式を行い、記念の航空写真も撮影した。110周年の同窓会長は鈴木敏夫さんで11月に110周年の記念式典を予定している。





2006  
全校生徒

20年前のタイム  
カプセル開封



2006年度	
校長	菅谷 孝行
同窓生	9,406名
全校生徒	358名

## 4 保育園

### (1) 松葉保育園

昭和28年（1953）5月1日、北島町の青木神社敷地内に「松葉保育園」が設置された。木造平屋建て延べ床面積約240㎡の園舎が建てられ、松葉保育園運営委員会が管理・運営し定員は63名であった。昭和46年（1971）1月、設置・経営主体を「社会福祉法人豊橋西部保育事業会」に変更した。昭和50年（1975）3月には、鉄筋コンクリート造2階建て延べ床面積約613㎡の園舎が完成、定員は120名に変更された。昭和60年（1985）には定員90名に変更され、昭和63年（1988）に保育室を増築した。平成18年（2006）3月30名の園児が卒園し、昭和28年の開園以来、卒園児は1,733人を数え、園児の約8割は松葉小学校に進学している。松葉保育園では、園児全員で「まつばのいのり」を毎朝元気に唱えている。最年長組は、月2回、空手の稽古に励み心身を鍛え、たくましく育っている。

まつばのいのり  
おたがいに、われひと  
よかれのころをもつて、  
ただしくつよく、  
つとめまして、  
よいひとになりたいと  
おもいます。  
まいにち ぶんをもって、  
たのしく みがきます。  
かみさま、おまもり  
くださいませ。



空手の稽古に励む園児たち



昭和35年第7回卒園生

### (2) くるみ保育園

昭和50年（1975）4月1日、町中保育の必要性と市民病院で働く職員の保育の場として、市民病院に隣接した松葉町に市の設置による「くるみ保育園」が開園した。鉄筋コンクリート3階建ての1、2階部分を園舎として利用し、延べ床面積526㎡、定員90名で、3階には、老人憩いの家が併設された。昭和55年（1980）に老人憩いの家が廃止され、保育園の遊戯室とした。平成13年（2001）園舎が改築され鉄骨3階建て延べ床面積約845㎡の園舎となった。平成18年3月25名の園児が卒園し、開園以来の卒園児は、556名で、市内ほぼ全域から通園している。松葉小学校へは約2割の園児が進学している。豊橋市立の保育園として、一時保育や休日保育を行っており、休日の利用も多い。心身の健康と自主・協調性が養えるよう講師を招いてサッカー教室を開催している。



サッカーを楽しむ園児たち

## 第2節 小学校活動と校区

### 1 三世代交流

松葉校区には三世代同居の家が多い。高齢の方が家業を守って仕事をしている家も多い。松葉校区の特徴ともいえる。この三世代のよさをもっと引き出し、子どもたちの成長のエネルギーにしたい。

子どもたちが、地域の一員として、地域の弱者である人々の安心安全を確保する手助けができるよう、様々な実践活動をして学ばせたい。このような考えのもと、平成16年(2004)から松葉校区老人クラブ連合会が間に立って、子どもたちからお年寄りの方に手紙を書いて元気を出してもらおうという活動を始めた。お年寄りの中には、一人暮らしの方や寝たきり、または身体が少し不自由で遠くには出掛けられない方など、人との交流が狭くなりがちな環境にいる方もいる。老人クラブでは、子どもたちの書いた手紙をもって出掛け、一人暮らしの方や寝たきりの方に一声かけて手渡しをする。夏・冬と交流を続けるなかで、お年寄りが動かない手で一生懸命書いてくださった返事をいただいてその温かい言葉に感激することも多く、子どもたちにとって大変貴重な体験となっている。

### 2 米作り

松葉小5年生の総合学習として一反ほどの田んぼを借り、米作りを始めたのは平成15年(2003)。学校から歩いて5分ほどのところに数年間休耕している一枚の田んぼを見つけたのは当時の校長(現在の教育長)の加藤正俊氏であった。稲作という農業体験を軸に据えた総合学習を通して子どもたちに「食」を見つめさせたいという熱い思いを地主さんに伝えたところ、快く貸して下さることになっ

たのである。田んぼの広さは約一反。校長以外はほとんど体験のない教師集団と子どもたちで学習がはじまった。草取り、水の管理、日照りなど数々の失敗を乗り越えたが、初年度は冷夏と不十分な草取りのせいで収量は280kg。下級生に伝えられた米作りのノウハウは次の年に生かされ、少しずつ米作りの腕もあがり、保護者の協力も増えて収量も米の味もよくなり、ブランド「松葉米」の名が校区に知られるようになってきた。できた松葉米を校区の人々にも食べてもらおうと毎年PTAの主催する「松葉ふれあい市」に出品。あっという間に完売になり子どもたちは大感激。収益は鍬の購入や肥料代に使う。今年も5月1日・2日に田植えを実施した。

松葉の米作りは、昔ながらの農法で行う。現在の機械化農法と比較して人々の苦勞と知恵を学ぶにはまたとないチャンスである。下級生も「5年生になったら、米作りができるんだ」と楽しみにしている。



### 3 松葉なかよしフェスティバル

平成7年(1995)9月、初めて豊川右岸で「水辺のつどい」を開催した。この活動は、豊川再発見を目的とした「母なる豊川」活動の一環として、校区を流れる豊川に親しみ自然の大きさを体験しようと開いたものである。低学年は工作で作った船を浮かべたり、シジミを採ったりして遊び、中学年は筏遊びを楽しんだ。そして、高学年は自作の筏で豊川横



断に挑戦。平成9年（1997）から「なかよしフェスティバル」と名称を変え、全校で川に入る豊川での自然体験活動が続いてきた。

ここ数年は、PTAが豊川までの道中や川の中の安全な活動場所を確保し、シジミ汁をふるまうなど、子どもたちの活動を応援している。毎年、子どもたちは、豊川の水の感触を味わい、シジミや小魚を採り、潮の干満を利用して砂の造形を楽しむなど、汽水域の自然を体感している。なお、「松葉なかよしフェスティバル」の名称は平成3年（1991）にみられる。この時は、子どもどうしの遊びが薄れている学校・家庭・地域が一体となって、学年を縦に35班に割り、遊びを通して学年を超えた人間関係をつくる活動として始まった。さらに「学校と校区の結びつきを」という趣旨に賛同した敬老会・PTA・子ども会が協力し合っ、フェスティバルは盛大な催しになった。現在、学年を越えた縦割り班の活動は、この豊川の自然体験をはじめとして、様々な児童活動として定着し、日常の縦割り班の遊び体験として生きている。

#### 4 松葉ふれあい市

毎年2月、PTAが中心となり、バザーを開催している。校区の人々に協力していただいた品物等を販売し、その収益を子どもたちの活動に役立てるというものである。

平成14年（2002）からは校区の人との「ふれあい」に力を入れ、今までの模擬店や販売に加えて、子どもたちが自分で作ってすぐ遊べるコーナー、ほっと一息つけるお抹茶席、プロの味喫茶コーナーなどを設け、子どもたちがお小遣いで買えるように、安くて良い品物の手作りを心がけるなど数々の工夫をしている。この収益金で観劇や音楽会など、子どもたちが普段の学校生活では体験できない貴

重な経験をしてもらおうと、毎年PTAの人々は知恵を絞って、常に新しい企画でがんばっている。

### 第3節 史跡と文化財

#### 1 吉田神社

##### (1) 沿革と由来

戦前戦後を通じて豊橋市民の間に夏の風物詩として愛され、親しまれてきた豊橋祇園祭の吉田神社は、古い呼び方では天王宮牛頭天王社、又は吉田天王社と言われており、明治2年（1869）3月に吉田神社と改められた。祭神は素盞鳴尊（すさのおのみこと）であり、武将の尊敬を受けてきた。特に源頼朝が深く尊敬していたことにより有名になった。古い記録に治承2年（1178）、源頼朝が雲谷普門寺に宿泊した時、天王社へ祈願のため名代として鈴木新十郎元利を参拝させ、その後、文治2年（1186）、同様に石田治郎為久が命を受けて参拝したことが記されており、その時二日市に天王社を建立したとある。これは今の本町の素盞鳴神社（わくぐりさま）と考えられる。また鎌倉時代の初期に頼朝の家臣、安達九郎盛長は、三河国奉行として神社仏閣を数多く造営したが、その時造営した天王社が吉田神社である。



室町時代には、田畑十貫百文の領地を所有し、天文13年（1544）、今川義元は六貫百文の畑を加えた。さらに慶長6年（1601）になって、徳川家康は改めて三十石を寄付して明

治維新まで続いた。永正3年(1506)牧野益時が社殿を造営し、天文16年(1547)今川義元が神輿を寄進し、さらに社殿を造営した。祭神の位は、天保6年(1835)10月、正一位の最高位を贈られ、明治4年(1871)7月郷社に、明治40年(1907)10月神饒幣帛料を供進される神社に、大正11年(1922)10月30日に県社に昇格した。昭和20年(1945)、社格が廃止され、現在は8か町(本町・関屋町・西八町・札木町・上传馬町・指笠町・三浦町・萱町)の氏神として崇敬されており、祭典は祇園祭として、毎年7月第3金曜日より三日間、祭事が行われている。

## (2) 百花園の碑

現在、吉田神社の社務所の前庭にあり、明治初めに、吉田藩士中西建三が丹精した花畑を、渡辺華山の息子・小華(画家)が百花園と名付けた。北側に豊川の清流と本宮山、東に吉田城の堀を隔てて遠く石巻山と弓張山系を望み、自然と調和した眺めは近郊一の名所でもあった。明治初期には福沢諭吉を初め、東西の名士も来豊の折にはここに清遊した。付近は画家・渡辺小華を初め、当時の豊橋在住の文化人が集う風雅の地であった。

明治末期に、時の商工会議所会頭・遠藤安太郎によって、この地に豊橋ホテルを開業したが、業績低迷のまま太平洋戦争中に吉田神社に買収され吉田会館となり、戦後改修されて現在社務所となっている。

## (3) 影降石

吉田神社の参道に入って10m程のところにある奇石。古書に「実に奇石にして諸人愛弄すべき面影あり、いつの頃にや空かき曇り手へきれきうほうと共に天より降りしかば影降石と号す」とあり、碩石か、牛の寝ている姿石などなど。

## (4) 城守護 金柑丸稲荷と末社正八幡社

金柑丸稲荷は吉田城の城内守護のため現豊城神社の地に祀られていたが、末社正八幡社と並んで本社(豊橋)の西北に祀られている。

## (5) 祭礼(豊橋祇園祭)

祭礼日程として毎年7月第3金曜日より3日間行われている。第一日目は、境内において手筒花火ならびに大筒花火が放揚される。夏の風物詩、豊橋祇園花火で奉納放揚される手筒花火は、当地方を代表する伝承民族行事で、その歴史は古く戦国時代の永禄元年(1558)、今川義元の吉田城代・大原備前守の奉納に始まると云われており、約450年の歴史と伝統を受け継いで今日に至り、手筒花火発祥の地として、平成5年(1993)に記念碑と塔が建てられた。この手筒は、五穀豊穰・無病息災・家運隆盛を神に念じ、若者の大人への門出、度胸試しとして奉納打ち上げられている。夏の夜空を轟音と共に立上る火柱、オレンジ色の雨のように降り注ぐ火の粉、その中に仁王立ちで放揚する勇姿、人と花火が一体となった花火打上げは、他に例を見ない豪快にして勇壮華麗な花火絵巻であり、豊橋っ子の心の故郷となっている。



第二日目は、神社北側の豊川河畔において、夏の夜空にアートを描き観客を喜ばせる仕掛花火。江戸時代には建物花火と呼ばれており、吉田の建物花火は日本全国にその名が轟き渡っていた。享保年間(1720年代頃)の松井嘉久著「東海道千里の友」に、享和2年(1802)の曲亭馬琴著「奇旅漫録」に天下第一の花火と激賞されている。また、当神社には、宝暦

12年（1762）より文政4年（1821）までの建物花火の絵図と祭礼の様子などが生き活きと記録された古文書が保存伝承されている。「温故知新」先人の技術を研究して益々楽しく心が踊る花鳥風月、あるいはキャラクター漫画などが星空に夢を競って描き出され、四百数十年の伝統ある豊橋祇園祭が手筒花火と共に特色ある花火祭として成長し、全国に豊橋祇園祭ありと評価されることを願って、仕掛花火・スターマイン競演会にアート賞を設置して、花火の芸術性、花火文化の向上に努めている。



第三日目は、神社にて神輿の巡幸前に、神社庁より献幣使を迎え、奏楽につれて浦安の舞が奉納され、厳粛な祭典が執行される。その後古式な神事として氏子八か町を巡幸される。昭和40年（1965）頃までは魚河岸の若者が神輿を担いで威勢の良い掛声で練歩き奉仕をしたが、その後魚市場の移転もあって一時取止めとなり、今では氏子の若者が代わって威勢よく担いで神役を従えながら巡幸している。神輿渡御は俗に頼朝行列と云われ、それぞれの神役を従えて途中、本町の素盞鳴神社（わくぐりさま）に休憩して、午後7時に神社に戻ってくる。行列に奉仕する神役には役割があり、飾鉾は、徳川時代は社寺六か寺（喜見寺・清源寺・西光寺・観音寺・朝城寺・田中近江寺）が奉仕したが、今は札木町が奉仕している。神輿は八か町の若者が担いで奉仕している。笹踊りは、大太鼓一人（指笠町）小太鼓二人（萱町）の三人で、何れも色鮮や

かな陣羽織の衣装を着し、華麗なる塗笠を被り、太鼓を打ち鳴らしながら踊り、囃子方の者は風流なる洛衣に編笠を被り、大勢同音に整い踊る。

頼朝は男児が充てられ、その服衣は金色の烏帽子を被り、青地金襴の直垂を着て太刀を帯びる。乳母（生母）は成人の男子が扮し、緋の衣装を着し烏帽子を被る。両者ともに馬に跨り、従者は徒歩にて薙刀を肩にする。両者は関屋町と西八町にて、2年ごとに交互に奉仕する。家来の武将名は、結城朝光、北条義盛、下河辺行年、足山盛長、佐々木高綱、三浦十郎。現在は少年少女が十武将に扮して徒歩にて奉仕している。饅頭配りは上伝馬町が奉仕する。神輿行列の最後を飾るのが饅頭配りで、衣装は緋緬綿の道服に袴をつけて塗笠を被り腰に幣をさし、馬に乗る。この饅頭配りは、まず湊町の神明社に詣でて饅頭を献上する。それから神幸に陪従するが、徳川時代には城内の関屋通りに仮設された御座敷で見物されている城主に挨拶の儀式を行い、その後神輿に陪従し、付添人たちは沿道で行列を迎える人々に饅頭を配りながら随行する。城主に対する儀式は今も行われていない。この饅頭を食べると夏病をしないという俗信が昔から伝えられ、この風習は現在でも残されており、沿道の人々から歓迎を受けている。この祇園祭が終わると、長い梅雨が明けて暑い夏の季節になることで人々から親しまれている。

## 2 湊町神明社

豊橋駅より北へ向かい、豊橋方面を望むと右手にこんもりとした森が見える。これが湊町神明社で、船町の交差点を右に曲がるとすぐに参道の入口である。



### (1) 沿革と由来

湊町神明社の創建は白鳳期と云われ、古くからこのあたりは吉田御園といい伊勢神宮の荘園であった。社伝では元和元年（1615）のころより神宮に御衣を献じてきた。神宮の式年遷宮に際しては、内宮や外宮の蕃垣御門を譲り受けている。

永禄4年（1561）、今川氏真是神地10貫35文を寄進、慶長6年（1601）には伊奈備前守忠次より黒印社領10石、さらに慶安2年（1649）には徳川氏より朱印社領10石の安堵を受けた。以後代々の将軍もこれを継承し明治維新まで続けられた。明治4年（1871）、太政官布達により郷社の社格を与えられたが、昭和20年（1945）の敗戦により社格は消滅した。



### (2) 御衣祭（おんぞまつり）

衣食住は生活の三要素とされ、神宮の祭儀でも最も重要視されている。その中で「衣」の祭を御衣祭と呼んでいる。この神衣は古くから三河の地より献ぜられてきたものである。東三河では大野の赤引の糸を用い、三ヶ日の岡本神戸の初衣神社の神服部氏が祓い清めて織り上げ行列を整えて、本坂峠を越えて吉田の御旅所を経て田町（現在の湊町）神明社へと運ばれる。

5月14日の祭典の後、風待ちして船町河岸から「太一御用」の轎を押し立てて伊勢に奉納される。これが御衣祭である。この祭は元和年間（1615～1624）に始まり、吉田城下最大の祭であった。吉田蕃儒者・中山美石は祭

の様子を次のように書き残している。

4月13、14日は「おんぞ」といって、婦人たちは紡績、紡織、裁縫などの仕事が一切休みとなり、寺子屋の手習いも無い。各町家の13、14歳くらいの女兒たちは、この日ばかりは天下御免の美しい晴れ姿に盛装し、手に手を取って、おんぞ歌をにぎにぎしく歌う。富豪の子女などは、付添の女なども連れていて、それは大変なにぎわいである。おんぞ歌「御衣ヨイヨイ、ヨイヨイ、ふれふれ六尺袖をナア、袖を振らねば踊られぬ。」と、はやし踊って4日間街中を練り歩いたものである。

この御衣祭は、明治8年（1875）まで続いたが中断、昭和22年（1947）に再興され今日に至っている。例祭日は5月14、15日で、今

では湊町と三ヶ日町の人々が、バスで伊良湖岬まで行き、フェリーで伊勢へ御衣を持って行く。



### (3) 神明社庭園

昔、豊川の堤防が切れ、現在庭園となっている所は特に低地であったため、一向に水が引かず沼地状になっていた。これに着目した茶人・山田宗徧は、池の中央に蓬莱之島を築島した。この庭園は三河の名園とされ、三河名従綜録にも掲載されている。山田宗徧は同島に弁天社の室宇を移した。築島弁天社の名称もこれにより生じたものである。嘉永7年（1854）の大地震により倒壊したが、同年末に再建されて現在に至っている。同社は「田町の弁天様」として広く親しまれ、特に技芸の神として吉田の技芸を習得しようとする人々の崇敬が厚く、多くの寄進があった。弁

天様のお使いは蛇とされているため、12年に一度の巳年には、弁天様の特別御開帳が行われるが、再建後初の御開帳は安政4年(1857)に盛大に行われた。これ以後、11回目の132年後の平成2年(1990)が、最も新しい御開帳の年であった。また、安政4年(1857)の御開帳を知らせた広告の立札1面が、神明社内の稲荷社殿から平成2年(1990)に発見され、同年の御開帳参観者に展覧された。この立札は東海道沿いの船町、包之町(元花園町)、新町の角の3箇所を立てると、同札に記載されている。



#### (4) 芭蕉句碑

この蓬萊之島の一隅に、「奥の細道」で知られる芭蕉の句碑が、桜御影石で建てられている。「寒けれど二人旅ねぞたのもしき」芭蕉が門弟の越人と共に来て、同じく門弟で渥美郡保美に蟄居中の杜国を訪ねて来て、吉田で投宿した際に詠んだと云われる。この句碑は、昭和7年(1932)1月に建立除幕式が行われ、地元の俳句同好者が中心となって、各1円あて拠出して出来たものである。

### 3 青木神社

松葉校区に数多い神社と仏閣がある船町を中心として、海陸をつなぐ出船入船の港が出来、三河地方の商人が集まり伊勢路への港として大いに栄えた。また、船町川岸の川下に北島町があるが、この北島町は当時(天文年

間)から清洲・馬見塚と共に、「とよ川」の河口の洲であった。洲から出来た島は、樹木が茂り立派な丘となって、人が住み着いていた。この地は「青木の森」と称し、今から約400年前(天文19年)に、天照大神を奉じて住民がお宮をつくり、酒井家次が社殿を造営した。それから後、造営補修を再三行い、元禄9年(1696)新たに造立、享保16年(1731)造替、万延元年(1860)補設等の棟札を社蔵。また寛文2年(1662)、小笠原耆岐守忠知、神鏡一面を本社に献じ、現在もなお保存している。青木神社と名付けられたのは、青木茂地に祀られたことにより、青木神社と名付けられたと伝えられている。祭礼は10月に行われている。



### 4 本町天王社 夏越祭(輪くぐりの神事)

本町天王社は吉田神社(上の宮)の下の宮で俗に横町の天王様と言われ、古くは「二日市天王」「二日市牛頭天王」「鎌倉荒神天王」「疫神天王」「吉田下天王」「興休天王社」などと呼ばれ今は一般では「輪くぐり様」で通っている。吉田神社が県社に昇格した際に、当社は無格社「素盞鳴神社」と称せられることになったが、古来由緒の深い神社であり、毎年7月31日(昔は旧暦六月晦日)の夜「夏越祭」が行われ、「輪くぐりの神事」が古くから盛大に挙行されている。この神事は、先ず神官によって祓いの行事が行われ、参詣の人々は茅の輪をくぐり身の穢れを祓い清め祭

壇に向かって御神体「神葎様」を拝し厄を人形に負わせて厄病を免れ、その夏を無事に越すよう厄病除けの神天王様に祈願する。夜中の神事を終わって神官祭詞を奏し、神葎様を大橋へお送りし、大川（豊川）へ流す。

この輪くぐりの神事は相当古くから行われ、文化15年（1818）、中山美石著の書物「諸国風俗問状三河国吉田領答書」にも詳しく書かれている。これによると、この「神葎様」の流れ着いた川下の郷村では、之は神の降臨なりとして、着いた日又は翌日、村人は皆垢離をとり仕事を休んでこの神葎様をば直ちに川より取り上げて生土神の社地の内に別に仮宮を造って之を納め、75日間毎夜神燈を献じて御祀りし参詣した。文久3年（1863）の6月晦日に流した神葎様が7月1日に十余町上流の大村の中川原に着いたのを同村の八所神社

の境内に祀り「御蘆天王宮」として現在も同社の末社として御祀りしてあるのはその一例である。



## 5 悟真寺

悟真寺は江戸時代龍拈寺、神宮寺と並んで吉田三か寺に数えられた浄土宗の寺である。元禄8年（1695）の由緒書によると貞治5年（1366）善忠寂翁（ぜんちゅうじゃくおう）和尚によって開かれ、開基時は吉田城三の丸付近にあったと伝えられている。永正2年（1505）、牧野古白が今橋城を築いたときに今の関屋町に移転した。寺格は三か寺中筆頭であり、歴代の吉田城主も寺の維持再建に力を注いだ。吉田藩中の大寺院であったので家

康・秀忠・家光などの歴代将軍や朝鮮使節の宿泊所として利用された。明治元年（1868）には三河裁判所が置かれ、同6年（1873）には小学校の校舎に使用された。明治11年（1878）明治天皇行幸の際には、行在所（あんざいしょ）となった。昭和20年（1945）の空襲によって寺は焼かれ、書画や書籍などの文化財も焼失した。現在の本堂は、昭和36年（1961）に建てられた。



## 6 龍運寺

龍運寺は、豊川に架けられた吉田大橋の傍らに開かれた寺で、山号橋本山という浄土宗の寺である。創立は天正6年（1578）で方譽念西（ほうよねんざい）上人の開山としている。江戸時代には、吉田港や吉田大橋と密接な関係を保ってきた。幕府の五大官橋として吉田大橋の修繕や架け替えの時には、江戸より奉行が来て寺を事務所とした。享和3年（1803）及び文化2年（1805）、伊納忠敬が渥美郡地方を測量したとき寺を宿舎としている。現在の本堂ほか庫裡・山門は平成8年（1996）に建てかえられた。境内の観音堂は昭和56年（1981）に建てられ、天井には、伊東隆雄画伯の龍の絵が描かれている。

## 7 その他の寺院

松葉校区にはこの他にもたくさんの寺院がある。関屋町には、西禅院、樹松院、龍興院、



専称寺、勢至寺、竹意寺、善忠院、東高院、宝蔵院があり、いずれも浄土宗の寺院である。松葉町には称名院、北島町には薬師寺、関屋町には賢養院、花田町石塚には大聖寺、大橋通一丁目に清源寺がある。

#### 第4節 人物

### 1 中村 道太

中村道太は、天保7年（1836）現関屋町で応変流柔術と和算術の指南として塾を開いていた吉田藩勘定方、中村家の長男として生まれた。幼少の頃から俊才で、漢学、国学、洋学を学び、福沢諭吉の「西洋事情」に感動して慶応2年（1866）江戸に出向き、福沢諭吉を訪ねて指導を受け、厚い信頼を得た。慶応4年（1868）官軍の吉田通過に際して、代官として吉田宿の警備にあたり、さらに版籍奉還によって負債を抱えた藩の財政整理に腐心した。

明治5年（1872）福沢諭吉の推挙により丸屋商社（現丸善）に入社した。丸屋は福沢諭吉の指導により洋書、洋楽、洋品の輸入販売を手がけており、中村道太は社長待遇を受けた。以後、中村をつてに多くの豊橋出身者が入社した。中村は、福沢が翻訳した「帖合の法」を基に複式簿記を研究し、丸屋の経営に応用した。また、講師として普及に努力するなど簿記学の先駆者として手腕を発揮した。

さらに金融や財政・銀行に興味を持ち、郷里豊橋で資金調達に奔走し、明治10年（1877）本町に第八国立銀行を設立した。国立銀行は全国で153行造られたが、豊橋は全国の大都市



中村道太

に先駆けて八番目に設立された。豊橋公園内には「中村道太碑」がある。

### 2 山本 速夫

山本速夫は、文政9年（1826）現関屋町で吉田藩の剣術師範を勤めていた亀井家に生まれた。はじめ孫六といったが、脱藩したとき山本一郎を名乗り、その後速夫と改名し、維新後もそのまま山本姓で通した。快活な子で幼少の頃から国学を学び、文武両道に秀でており、勤皇の志が強かった。文久3年（1863）、藩主が大坂城代として大坂へ赴くとき、これに従い撃剣師範となって講武所の世話役を務めた。翌年7月禁門の変のころ脱藩し、山本姓を名乗り討幕運動に加わった。京都では侍従の鷺尾隆衆（たかむつ）を頼り、香川敬三（鯉沼伊織）、坂本龍馬とともに白河邸に同居し、彼らと共に活動した。慶応3年（1867）、鷺尾が密勅を奉じて香川敬三等を率いて高野山で拳兵したとき、これに従い東三番隊長として指揮をとった。翌慶応4年（1868）の正月、鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗戦すると、吉田藩も新政府軍に協力するようになり、山本速夫も吉田にもどった。同年4月、三河、遠江、駿河の三国を管轄するため三河裁判所が悟真寺の境内に設置され、速夫は権判事に任命された。三河裁判所は2ヶ月あまりで廃

#### 国学者 羽田野敬雄（たかお）

中村道太、山本速夫とも羽田野敬雄に国学を学んでいる。敬雄は、1819年、21歳のとき羽田八幡宮の神官羽田野家の婿養子となり、36歳で家督を継いだ。若い頃から読書家であり、蔵書も多く、屋敷内に文庫を設立、一般に公開した。幼少の頃「窃盗犯が忍び込もうとしたところ、その家では、毎晩遅くまで読書している子供がいて、ついその家には入れなかった。」というエピソードが残る。

止となり、その後は若松県の大参事などを務めた。

### 3 大口 喜六

大口喜六は、明治3年（1870）船町に生まれ、幼少の頃から秀才の誉れ高く、漢学・英語などを学び、上京して東京英語学校に入学したが、父をなくしたため、東京帝国大学の選科で薬学を修め帰郷した。帰郷後は薬局を開業していたが、政治家を志し、明治28年（1895）豊橋町議会に初当選した。明治31年（1898）、三浦碧水の後を受け、町長に就任した。明治34年（1901）ごろから市制施行問題が表面化し論議を重ねたが、明治39年（1906）8月1日、市制を施行することに決し、喜六は初代市長に選任された。県議会議員を2期務め、市長には三度就任したが、明治45年（1921）衆議院議員に初当選して以来、昭和17年（1942）まで、10期衆議院議員を務めた。その間、昭和2年（1927）に大蔵政務次官に就任したほか、多くの委員を歴任した。その演説には定評があり、国会屈指の財政通であったと言われ、終始一貫して国家国民のために政治を行った人物であると評価されている。また、政治家とは別に郷土史の研究家としても知られ、「国史上より観たる豊橋地方」・「豊橋市談」・「豊橋市其付近」などの著書がある。平成18年（2006）は、市制100周年



大口喜六と復刻版「国史上より観たる豊橋地方」

にあたり、記念事業の一つとして、三河芭蕉会により著書の「国史上より観たる豊橋地方」の復刻版が発行された。

### 4 斎藤 一握

斎藤一握（九郎左衛門）は、寛保3年（1743）、現船町に生まれた。14歳の頃から和算を学び、27歳のとき、関孝和が確立した関流和算について学び、その後は、独力で和算を研究し、奥義をきわめるに至った。和算は、慶長年間（1596～1615）のころ、豊臣秀吉の家臣毛利勘兵衛が中国に留学して研究し、わが国で発達した独特の数学である。吉田における関流和算の流れは、斎藤一握によって始められ、弟子の牧野伝蔵、さらには伝蔵から彦坂菊作へと伝えられた。一握は、算学のほか、易学、天文学にも精通し、名声は次第に高くなり、弟子も易学15名、天文学19名、算学66名を数え、算学を学んだ者は、江戸、駿河から伊勢、志摩にまで及んだ。孫弟子にあたる彦坂菊作は、藩校時習館の教授に任命され、自宅に数学塾「秀文堂」を開設、入門者は数千人に及んだといわれる。また菊作は、文久元年（1861）、藩主の命を受けて豊川の堤防に風車台を設け、ポンプを動かして豊川の水をくみ上げ、吉田方方面の水田に灌漑した。これは蘭書を参考にし、オランダの風車をヒントにして考案したものである。一握には、「開方式」なる著書がある。また、龍拈寺には、彦坂菊作の記念碑が建てられている。尚、菊作は、現新本町の生まれである。

### 5 鈴木 玄仲

鈴木玄仲は、文政12年（1829）、関屋町に生まれた。11歳の頃から漢方医学を学び、その後、江戸に出て吉田藩江戸詰医師、利光仙

庵に蘭学を、後の幕府官医、戸塚静海について西洋医学を学んだ。嘉永2年(1849)帰郷して開業し、直ちに一般庶民に対して種痘を試みた。日本で牛痘種痘法を最初に成功させたのは長崎の蘭館医モーニケで嘉永2年(1849)のことであり、玄仲の実施と同年で、ジェンナーが牛痘種痘法を発見してから50年経っている。翌、嘉永3年(1850)には、現花園町で開業していた浅井弁安が種痘を実施しており、吉田は全国的にも早い時期に種痘が行われた地域である。文久3年(1863)玄仲は再び江戸に出て、杉田玄白のあとを継いだ杉田玄端を訪ね、西洋医学の研究に役頭した。翌年、帰郷して吉田呉服町に開業、さらに明治8年(1875)、現豊川市に開業した。この頃、種痘は国・県の指導により広く行われるようになったが、種痘料が高く当時の米二升のほどの値段で、貧困者はなかなか受けることができなかった。玄仲は種痘の普及を図るため、中村道太等の協力を得て、自宅と豊橋本町に無料種痘所を開設し、貧しい家庭の子どもたちに種痘を行った。また、明治21年(1888)、三浦碧水、福谷元吹等とともに豊橋慈善病院(後の豊橋市民病院)の創立に力を尽くした。鈴木玄仲は、吉田藩医大沢玄龍、開業医浅井弁安とともに吉田三名医といわれた。

## 6 夏目 可敬

夏目可敬は文化4年(1807)頃、現上伝馬町に生まれた。生家は代々金物商「ささや」を営む豪商であり、可敬は家業を継いだ。生来学問を好み、弘化元年(1844)、秋里籬島の「東海道名所図絵」に刺激され、「参河国名所図絵」の編述を思いついた。そのため家業をなげうち古今の文献を読破し、現地に赴き調査にあたった。8年の歳月を費やして

東三の部11巻を完成させた。続いて西三の部を執筆する頃には、家は没落し、妻を失いながらも健筆をふるった。西三の部12巻を脱稿し、浄書しようとしていた矢先病没した。嘉永4年(1851)完成した東三の部の序文に「弘化元年(1844)より本国名所図絵を綴らんことを思いたちぬ、されど元来螢雪の才短ければ、ことし八年の星霜を経て、片なりながら漸くこの巻をものしつ、次で宝飯郡に草をおこして設楽・八名・渥美と、まず、東四郡を綴りて、後西碧海郡、賀茂・額田・幡豆郡に筆を取めんとす。」とある。

## 7 佐藤 閑翠

佐藤閑翠は、文久3年(1863)上伝馬町の山下家の長男として生まれた。山下家はろうそくの販売業を営んでおり、豊川稲荷などに出入りする豪商であったが、8歳のときに船町に住む外祖父佐藤家の養子となり、18歳で家督を相続、3代目又八を襲名した。佐藤家は代々木挽き商を営んでいたが、西洋式の製材機が導入されるに至って、閉店を余儀なくされた。明治22年(1889)、又八は、大野銀行豊橋支店長として招かれ、28年間銀行員を務めた。退職した閑翠は、没するまで郷土史研究に生涯を投じた。船町の龍運寺には、船町文庫という町関係の古文書数千点が収蔵されていたが、閑翠は、この古文書の研究にとりかかり「船町史稿」全5巻を完成させた。他に「郷土人物年表」など多くの論稿がある。

## 8 木村 庄之助

16代木村庄之助は、名を新助といい嘉永2年(1849)現船町に生まれた。父親の柘正平は、「中野川」というしこ名を持つ田舎相撲の強豪で、新助は父に連れられて相撲場に通



い、興味を持つようになった。しかし、体格が優れていなかったためか行司にまわった。10歳になると奇童と言われるまでに技術が上達し、多くの人に認められるようになった。安政6年（1859）秋、吉田で江戸相撲の興行があったとき、新助は江戸相撲の年寄りに預けられ、江戸に出向き行司の修行をすることになった。江戸に着くと、13代木村庄之助の門下となり、日夜行司の修行に励み、文久3年（1863）行事の資格を許され、木村新助として13歳で初めて回向院本場所の行司を勤めた。新助は明治30年（1897）12月、49歳で行司最高位木村庄之助を襲名した。東京両国に国技館が完成し、梅ヶ谷・常陸山といった人気力士が活躍した明治後期の黄金時代には、庄之助も全盛期を迎え、「東梅ヶ谷、西常陸山、中をとりもつ庄之助」と歌にうたわれ、名行司として、その名を全国に知られた。力士の取り口から得手不得手に精通し、相撲界の生き字引といわれるなど、晩年まで、ちょんまげ、袴姿で土俵を努めた姿は、立派であったと伝えられている。



木村庄之助

## 9 中島 駒次

中島駒次は、慶応2年（1866）渥美郡野田村（現北島町）に生まれた。尋常小学校4年を終了したあと家業の農業を手伝ったが、明治13年（1880）から5年間、夜学に通って勉学に励んだ。当時の農家は、米や麦を作っていたが、駒次は、「何かいいものを作りたい。」と研究を重ね、明治20年（1887）頃か

ら玉ねぎや桃を栽培する園芸農業に踏み切った。さらに試行錯誤の末、促成・抑制栽培が可能な温室栽培に着手した。明治34年（1901）、家の風呂場横に5坪のガラス室を建設し、風呂の湯をガラス室に通して夜間の温度調整を行い、山椒の栽培を始めた。翌年にはトマトの栽培を、秋にはきゅうりの抑制栽培を始めた。明治40年（1907）には、温室を30坪増築してメロンの栽培を始めた。駒次は、夜間保温のため経済的な中島式ボイラーを開発した。これは、ドラム缶を切っただけでかまどを作り、おがくずをつめて火をつけ、湯を沸かして温室を暖めるもので、おがくずはゆっくりと朝まで燃え続けるため、設備費も燃料費も安く、手間もかからない重宝なものであった。こうした創意工夫した設備や栽培研究をすべて公開し、実地指導も行ったため、各地から見学者が殺到した。大正14年（1925）からは、毎年1～2名の研修生と学生の夏季実習生の受け入れを始めた。こうして駒次の指導を受けた人たちによって温室栽培が広まり、温室園芸が大きく発展した。晩年には、販売促進のため組合作りに尽力し、昭和4年（1929）豊橋温室園芸組合を設立した。北島町薬師寺には、温室園芸の創始者としての功績を称え、「温室之元祖中島駒次頌徳之碑」が建てられている。



中島駒次

## 10 清川 正二

清川正二は、大正2年（1913）関屋町に生まれた。名古屋高商に通う清川正二は、19歳でロサンゼルスオリンピックに参加し、100

m背泳ぎに出場1分8秒6のタイムで優勝した。2着には入江稔夫、3着には河津憲太郎が入り、メダルを独占した。男子100m背泳ぎで、史上初の快挙であった。清川は、4年後のベルリン大会にも出場し、同種目で銅メダルを獲得した。また、第2次世界大戦直後から7年間にわたり日本代表チームのヘッドコーチを務め、「フジヤマのトビウオ」といわれた古橋廣之進らを率いて指導した。昭和44年(1969)にI O Cの委員に就任、同50年(1975)には、I O Cの理事に就任した。昭和63年(1988)のソウルオリンピックでは、同種目で51年ぶりに優勝した鈴木大地の表彰式に出席し、自らの手で金メダルを授与するシーンが見られた。清川氏の栄誉をたたえ、清川記念エージグループ水泳競技大会が毎年行われており、40回を数え多くの参加を得ている。



メダル独占、右から清川、入江、河津

## 11 中村 正義

中村正義は大正13年(1924)花田町(現大橋通3丁目)に生まれた。松葉小学校卒業後、商業学校に進んだが持病が悪化、中退して絵の勉強をするようになった。生涯の友人となる星野真吾と出会い、星野が進んだ京都の絵画専門学校を目指したが、受験資格が無く、昭和21年(1946)、京都に住む中村岳陵に師事することになった。同年「斜陽」が日展初

入選となり、同27年(1952)には「女人」が特選となり白寿賞を授賞、その名を広めた。昭和35年(1960)、36歳の若さで新日展の審査員となった。しかし考え方の相違があり、翌年には日展を脱退した。このころの正義の画風は、あざやかな色調で、大胆で単純のうちにおののくナイーブで不安な心象を投影した風景や人物であった。さらに「絵はきれいであってはならない。うまくあってはならない。芸術はいやらしい。」と主張した。正義の絵は変わり、絵を美しいものと思込んでいる人たちには、目をそむけたくなるような絵を描いた。日展を脱退した後も、数々の美術展・個展に作品を出展し、新しい日本画を目指す正義の絵に共感する人々も数多くいた。昭和39年(1964)映画「怪談」のために描いた大作「源平海戦絵巻」5点は、代表作となった。



中村正義

## 12 その他の人物

服部 弥八 豊橋町長、同商業会議所会頭  
愛知県議会議員(船町)

原田 万久 煙草製造「吉田あかこ」など  
商業会議所会頭(湊町)

三輪 弘忠 わが国最初の児童文学書著作  
「少年之玉」(関屋町)

ほか、松葉校区は、政治家、画家など多くの  
人材を輩出している。

# 参 考 文 献

とよはしの歴史	豊橋市
豊橋の史跡と文化財	豊橋教育委員会
郷土豊橋を築いた先覚者たち	同
豊橋市戦災復興誌	戦災復興誌編集委員会
船町史稿	佐藤 又八
松葉小100年誌	記念誌編集委員会
上伝馬町誌	上伝馬町誌編集委員会

## 編 集 後 記

平成17年3月に第1回の編集会議を開催し、毎月2回程の割合で会議を行ってきた。

レイアウトや役割、担当を決めて作業をスタートさせたが、脱稿、提出が1年半先ということなので、集まってもなかなか軌道に乗らず、昔話に花が咲いたり四方山話が出てきたりと、編集は遅々として進まなかった。

取りまとめをということで、編集のご指名を頂き、各委員の意見や委員会の日時の調整など、戸惑う事ばかりであったが、市役所からの二人のサポーターの方には大いに感謝している。委員の中に、校区の長老の方々にも参加を頂き、松葉にまつわる記録や所蔵されていた資料、写真など素晴らしいものを多く提供していただいた。

平成9年に松葉小学校が創立100周年記念誌を発行していたので、その中からも参考にさせていただき、大いに助かった。

ここに市制100周年記念事業の松葉校区史の編纂にあたり、出来上がった記念誌が皆様に愛読されるならば、関係各位のご尽力に感謝すると共に、関係者の喜びこれに優るものはない。

編集委員長 夏目 豊

### 松葉校区史編集実行委員

#### 編集委員名

加藤 卓男      黒川 喜七      佐藤 多一      鈴木 敏夫      曾田 益充  
土井 松男      夏目 豊      近藤 禮子

#### サポーター

青木 秀水      金田 好正

### 校区のあゆみ 松葉

平成18年12月25日発行

編 集 松葉校区総代会  
松葉校区史編集委員会  
発 行 豊橋市総代会  
印 刷 髙 ぎょうせい

2100

古紙配合率100%再生紙を使用しています







